



徳島大学渭水会々報

第46号

発行／徳島大学渭水会
徳島大学総合科学部同窓会

題字：田中 双鶴 氏



「彼方へ」

峯 幸子 氏

剣山の遊歩道を下っていくと、霧が山肌を流れていくの見える。
足が地面からフワリと持ち上がり、一本の巨樹の方へ飛んで行こうとする。
大きな桂のうでは何本もあって、“いっしょに行こう”と言う。
ハート形の葉っぱが可愛い。まるで千手観音様のようだ。

関連記事→P18

目 次

会長ご挨拶	声を上げることの大切さ	渭水会会長 石井 博 ……	3
学部長ご挨拶	学部長就任のご挨拶	総合科学部長 栗栖 聡 ……	4
総合科学部では今 (28)	社会で活躍できる学生が育っています	評議員 総合科学部教授 桑原 恵 ……	5
Topics	第9回とくしま芸術文化賞、渭水会より二人受賞 ……		6
	難題続き	竹内 菊世 ……	7
特集	こころのケアの専門家を目指して ～臨床心理学を学ぶ～		
	●どんなに小さなことでも、私にできることを	富永 美咲 ……	8
	●徳島大学総合科学教育部 臨床心理相談室のご案内 ……		9
	●臨床心理士の仕事？	岩崎 初美 ……	11
	●臨床心理学専攻の誕生と発展	濱田 治良 ……	12
研究最前線⑤	地方創生とハイブリッド・ガバナンス	総合科学部准教授 小田切康彦 ……	13
連載④ 私の職場 My Workplace	徳島の魅力をアナウンス	安倍 久恵 ……	14
進路通信 (4)	学生の就職活動の現状と大学支援の強化について	就職委員長 佐藤 充宏 ……	16
総科のおたから [其ノ五]	櫻並木 ……		17
心に残る風景たちを描く		峯 幸子 ……	18
輝く新星③	～第3回渭水会会長賞～		
	●多くの出会いに支えられた大学生活	片桐 麻衣 ……	20
	●徳島で、空間情報科学を、学ぶ	岩本 侑姫 ……	21
	●挑みつづける	吉川 綾乃 ……	22
	●渭水会会長賞表彰要項 ……		23
Report	児童文学作家 くすのき しげのり講演会 ……		26
スタートライン	……		27
	●「なんとなく」	永井 航太	
	●徳島大学での6年間を振り返って	高岡美沙希	
エッセイ	……		29
	●目指すべきところ	渡井口和豪	
	●音楽は心の癒し	千葉真由美	
	●博士号取得までの10年間を振り返って	棚田 教生	
	●草創期の恩師を偲んで	山田 秀雄	
助成事業	……		34
	●平成28年度 高校・特別支援学校総会並びに講演会	林 博子	
	●徳島の教育を考える会及び同窓会	萬玉 吉博	
	●徳島市退職校長会講演会	宮北美恵子	
	●徳島大学書道部・OB会書作展	富久 和代	
	●教育課題研究会	奥村 兆男	
	●平成29年度 高校・特別支援学校総会並びに講演会	上野 清文	
総科ニュース	……		48
徳大ニュース	……		50
事務局だより・編集後記	……		52



渭水会会長
いし い ひろし
石井 博

声を上げることの大切さ

「徳島大学渭水会」会員の皆様方におかれましては、日頃より本会発展のためにご支援ご協力を頂き誠に有り難うございます。心より感謝申し上げます。

さて、近年、食品ロスの問題が今後の地球環境や生活の仕方を考えていく上で、早急に手を打たなければならないテーマだと言われています。先日、インターネットのニュースを見ていますと、京都新聞の「声かけで宴会食べ残し4分の1 京都市、飲食店で調査」との見出しが目にとまりました。

内容は、次のようなものでした。「京都市が行った、宴会の食べ残しを減らすための試みで、幹事役による『残さず食べよう』の声かけなどがあると、ない場合に比べて食べ残し量が4分の1に減らせるという結果が出た。市はごみ減量に向けて、手つかずのまま捨てられている『食品ロス』の対策を重視しており、声かけ運動の普及など対策を強める」また、このことは何も宴会に限ったことではなく、徳島新聞にも、「食品ロス削減へ行動を」との見出しで、次のような記載がありました。

「……農林水産省の2013年度推計によれば、日本の食品ロスは年間約632万トンに上り、その約半分の約302万トンは家庭から発生している。632万トンといえば、国連の食糧支援機関であるWFPが、14年に世界82カ国8千万人に行った食料支援約320万トンの2倍に相当する量である。又、この量をお米に換算すると、私たちは毎日おにぎりを2個ずつ捨てていることになる。……（前後の一部略）」

食品ロスについては、国民一人ひとりが、気をつけて取り組まなければならない問題ですが、声をかけることによって食べ残しの量が4分の1に激減したという事実は、いかに声を上げ、呼びかけることが大切かを表す良い事例だと、強く感じました。食べ残しは良くないとみんな思っているのに食べ残されていたものが、声かけによって劇的に変わってきた状況は、教育の各場面においても共通して応用できることだと思います。私たち一人ひとりが、こうすべきだ、こうあることが望ましいと感じることは、遠慮せず、声を上げていくことが、社会が変わっていく要点だと思います。

日本の社会が、これまで進化し続けてきたのは、過去の歴史において、先人の方々が勇気を奮って粘り強く声を上げ続けたことによるものであり、後にくる我々も、日常の生活の中で気づいたことや改善すべき事について、これからも、しっかりと声を上げていきましょう。

さて、本年度もアスティとくしまで入学式が行われました。また、日は異なりますが、総合科学部のけやきホールにおいて、新入生へのオリエンテーションも行われました。その中で、毛利理事長より同窓会組織渭水会の歴史や活動内容等の紹介をさせていただきました。

新入生のこれからの研鑽、徳島大学総合科学部の発展と渭水会会員の皆様の今後益々のご活躍を祈念して、ご挨拶とさせていただきます。

（昭和49年 教育学部中学校課程保健体育科卒）



総合科学部長
くりす さとし
栗栖 聡

学部長就任のご挨拶

渭水会会員の皆様には、常日頃様々な形で総合科学部の教育、研究、運営等をご支援いただき、誠にありがとうございます。

本年4月に平井松午前学部長の後任として、学部長に就任いたしました。今後とも、皆様のご理解とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

さて、総合科学部は、平成28年度（2016年度）から新しい学部として再出発いたしました。すなわち、常三島地区において、工学部が理工学部にも再編され、新たに生物資源産業学部が創設されると同時に、総合科学部も、それまでの文理融合型の3学科（学生定員265名）から、文系中心の社会総合科学科（学生定員170名）へと再編されました。よって、現在の1年生、2年生が新総合科学部、3年生、4年生が旧総合科学部に所属しています。

新総合科学部には4つのコースがありますが、「国際教養コース」は、国際キャリアに生かせる知見、スキル、文化的見識及び経験を有する人材を、「心身健康コース」は、心理学やスポーツ健康科学を柱に、地域の健康生活を総合的に支援できる人材を、「公共政策コース」は、社会科学の知識を基盤として、公共政策的視点から解決策を提案する人材を、「地域創生コース」は、地域科学、情報科学などを基盤として、地域や社会の未来を創造しうる人材を、それぞれ養成することを目指しています。

さらに、これらのコースでの専門教育以外に、学生たちの問題解決力を養成するために「実践学習科目」を設けています。社会人基礎力の涵養、大学での学びやキャリア・デザインに必要な能力を養成するための「キャリアプラン入門」、コミュニケーション能力、レポート作成能力、情報収集力を養成するための「課題発見ゼミナール」、これらを履修した上で、2年次以降、「総合科学実践講義」によって、社会と連携した問題解決への方策について理解を深め、さらに「総合科学実践プロジェクト」によって、実際に現地・現場に赴いて課題解決に取り組むことになります。

総合科学について、広く浅く学ぶことであるとか、漠然としていて実態がよくわからないといった評価を受けることがあります。しかし、特定の専門分野から出発して、あるいは特定の問題解決への関心から出発して、一定の必然性をもって諸学の連関が形成されていき、自ずと総合科学的視点が獲得されていく、このようなプロセスを想定することもできるのではないかと思います。深い穴を掘ろうとすれば、自ずと穴の直径も広がるように、あるいは、高い山を築こうとすれば、自ずと裾野が広がっていくように、中核的部分があってこそその総合性ということになります。その意味において、学生一人一人がその中核的部分を自ら育むことが重要であり、教員はそのサポート役を担う必要があります。

上述のように、総合科学部は新しい一歩を踏み出したところですが、本学部は今回のみならず、これまでも幾つかの転換点を経てきております。明治7年（1874年）発足の徳島師範期成学校以来、徳島師範学校、徳島大学学芸学部、教育学部、総合科学部へと至る長い歴史がありますが、その歴史の中で、転換点ごとに時代の要請に応じて変化した部分があると同時に、他方で時代を超えて継承されてきた部分もあるように思います。ある大学の校歌に「集まり散じて人は変われど、仰ぐは同じき理想の光」という一節がありますが、総合科学部にとってのこの「同じき理想の光」とは何なのでしょう。それぞれの時代を担ってこられた様々な世代の渭水会会員の皆様は、この問いに対してどのような答えを提示されるのでしょうか。我々もまた、皆様のご意見を伺いながら、答えを模索していきたいと思っております。

そうした中で、渭水会会員の皆様のご期待に沿えるような総合科学部及び大学院を実現すべく努めて参りたいと思っておりますので、今後とも皆様のご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

今

社会で活躍できる学生が育っています

評議員 総合科学部教授 くわばら めぐみ
桑原 恵



総合科学部は、教育内容の多彩さが際立っています。文・法・経から芸術学部までを含めたような教育を受けられる多彩さです。学生たちは、このような多様な学問に触れ、視野を広げて卒業していきます。文学部だけで学んできた私には、うらやましい程に贅沢な学部です。平成28年度からは、学部改組を経てさらに実践的な教育を進めることに力を入れています。昨年度佐久間先生が紹介されたグローバル化教育の推進もその一つです。今回は、地域で活躍できる、行動力のある学生の育成についてご紹介したいと思います。

すでに平成21年度の学部改組の時に、地域について学び、地域で活躍できる人材育成を重視した教育が学部教育の柱の一つとされました。そして、体験活動や実習活動、社会調査などを取り入れた教育に取り組んで来ました。この方向性は、昨年度発足した新総合科学部にも受け継がれています。そして、それは特定のコースに限った教育ではありません。先生方のご専門をご紹介する形で例をあげてご説明してみましよう。

たとえば、地域づくり、まちづくり、というキーワードで教育や研究に取り組んでおられる先生として、地域社会学、政策科学（地方自治）、スポーツ社会学といった先生方がおられます。それぞれ、地域創生、公共政策、心身健康コースでフィールドワークも含めた教育をされています。つまり、総合科学部では、国際教養コースが進めている留学も含めると、全てのコースにおいて、実践的な教育がなされ、地域や社会に貢献できる人材を育成していると言えるのです。

先生方のご専門からは離れても地域に貢献できる実践的な教育をして下さっている先生も沢山おられます。一つの面白い例をご紹介しますと、文化人類学をご専門とされている先生がご担当の社会調査実習という科目で、学生と一緒に狩猟免許を取得し、鹿などを捕獲して、ジビエフレンチに利用するという教育です。この科目では、地域振興と、昨今問題

視されている害獣被害という二つの問題を一举に解決できる、「一粒で二度おいしい」地域政策を開発する教育内容となっているのです。

このような教育の成果は学生たちにも確実に現れています。毎年7月から8月にかけて、海外の協定校から迎える短期留学生たちは、学外での様々な体験も含めたサマープログラムを受講します。その体験先などを選定し、体験先施設と交渉し、留学生と共に見学・体験のお世話をする中心となっているのは、留学経験のある本学部の学生たちです。学生たちが施設と交渉し、計画を立て、留学生とコミュニケーションをとりながらサマープログラムのお世話をしているのを見てみると、とても頼もしい学生が育っていると誇らしく思います。

散漫なご紹介となりましたが、渭水会の皆様には、改組を繰り返しながらも、総合科学部らしい多彩な教育を受けながら、社会で活躍できる実践力を身につけた後輩たちが沢山輩出されていることについて、誇らしく思っていただければと思っております。



台湾科技大学の皆さんと
～県立埋文センターで勾玉造り～

Topics

平成28年度第9回とくしま芸術文化賞

かま だ く に ひろ たけうち きく よ
鎌田 邦宏さん(美術/彫刻)、**竹内 菊世**さん(文芸/小説) 受賞!

ビッグニュース! 昨年に続き、 平成28年度第9回とくしま芸術文化賞に 渭水会よりお二人の受賞です!

とくしま芸術文化賞は、徳島県における芸術文化の振興に特に業績顕著な個人の活動を顕彰するために、平成20年度より公益財団法人 徳島県文化振興財団が行っているものです。昨年度は渭水会会員である児童文学作家 くすのきしげのりさんが受賞されました。そして、今年度は、彫刻家の鎌田邦宏さん(会報第43号 P4参照)と、作家として、そして徳島県の文芸団体のリーダーとして活躍されている竹内菊世さんが受賞されました。3名の受賞者のうち、2名が渭水会というビッグニュースに、誇らしい気持ちでいっぱいになりました。



いつも“きりぎりしゃんと”した竹内菊世さん



受賞パーティーのもよう。各方面で活躍される竹内さんらしく、華やかな会となりました



平成29年度徳島県表彰も受けられました

●プロフィール

徳島市在住。1955年徳島大学学芸学部小学校教員養成課程卒業。県内小学校、県立聾学校、徳島県教育委員会に勤務しながら、「徳島作家の会」「阿波の歴史を小説にする会」「徳島ペンクラブ」に所属し、執筆活動进行。2007年、文芸同人誌「飛行船」を創刊し、代表を務める(会員15名。年2回発行)。2013年には県下の文芸団体をまとめる「徳島ペンクラブ」会長に就任(会員160名)。年1回機関誌を発行しながら、各種行事を企画・開催。

教育書、小説など著書は多く、徳島新聞夕刊に連載した『評伝 徳島人五宝翁太郎』でも広く知られる。2010年には「飛行船」が第4回富士正晴全国同人雑誌賞特別賞受賞。2014年、吉野川をテーマに農村の衰退、旧家の没落を描いた『大河汪汪 母なる吉野川』が第38回徳島県出版文化賞受賞。2017年、平成28年度第9回とくしま芸術文化賞受賞、平成29年度徳島県表彰(文芸振興)。

《作家歴》

- 1934年 兵庫県西宮市生まれ
- 1955年 徳島大学学芸学部卒業
- 2007年 文芸同人誌「飛行船」創刊
- 2010年 第4回富士正晴全国同人雑誌賞特別賞受賞(「飛行船」)
- 2013年 「徳島ペンクラブ」会長に就任
 第38回徳島県出版文化賞受賞(『大河汪汪 母なる吉野川』)
- 2017年 平成28年度 第9回とくしま芸術文化賞受賞
 平成29年度 徳島県表彰(文芸振興)

《著書》

- 『しのぶちゃんの絵日記』(1977年 徳島県教育印刷)
- 『聴覚障害児の作文指導 ―その六か年の軌跡』(1985年 明治図書)
- 『徳島のベスタロッツ 障害児教育の先駆者五宝翁太郎評伝』(2001年 徳島県教育印刷)
- 『舞子』(2005年 文芸社)
- 『大河汪汪 母なる吉野川』(2013年 徳島県教育印刷)



竹内さんが代表を務める同人誌の数々。
左端は文芸同人誌「飛行船」創刊号(2007年刊)



教育書や小説など著書も多い。
中央の『大河汪汪 母なる吉野川』(2013年)は
第38回徳島県出版文化賞を受賞

難題続き

たけうち きくよ
竹内 菊世

文芸の道に入ったのは、およそ五十年前。教員という正業を持ち、結婚をして二人の子どもの世話をし、飲んで帰りの遅い夫に腹を立て、日々の生活に疲れていた。

そんな折、ふと目にした「徳島作家」に相当な衝撃を受け、同僚を通じて主宰の田中富雄氏に連絡をしてもらった。田中さんは何も分からない私を優しく迎え入れて下さった。

その頃の「徳島作家」は、田中さんを始め、芥川賞候補となった岡田みゆきさん、直木賞候補となった中川静子さんなど、錚々たる作家を擁した集団だった。作品については特に厳しい批判が跳んだ。多くの人が入って来ては耐えきれずに止めていった。私の唯一の取得は、叩かれ強いことである。才能も経験もない私は、ただ辛抱強く居続けた。

田中さんが逝去され、「徳島作家」が廃刊になった時、徳島で創作活動をしていく場がないことに気が付き、古稀を過ぎた年齢ではあったが、文芸同人雑誌「飛行船」を立上げた。とりあえず5号までは続けようと、軽い気持ちで始めたのだが、時の経つのは早いもので、早や十一年を経過し、今秋22号を発刊するまでに育った。

飛行船を始めてから私の老後は大きく変わった。暇があるので、興味の赴くまま何にでも手を出していたが、文芸活動を第一義にしなければならなくなった。まず、徳島ペンクラブ会長という予想だに

しなかった大役が降って来た。それに伴う県下のいろんな委員も務めなければならない。徳島ペンクラブの行う様々な年間行事をそつなくこなすには、相当の勢力と時間を必要とする。にも関わらず、「阿波の歴史を小説にする会」「野上彰の会」など、会長を引き受けざるを得ない状況に追い込まれた。お陰様で、と、あえて言うが、毎日忙しい日々を送らせて貰っている。八十三歳の老骨に鞭打ち、あれこれと神経を張り詰め、難題に追われ、忘れ物を主とする失敗に戦きながら、すぐ一日が過ぎ去る。

年間に小説を三篇、徳島新聞のコラムを月二回、その他頼まれごとの雑文が十五、六と、しょっちゅうパソコンに向かっていなければならないハメに陥っている。体を動かしていないと心身ともに弱るとの強迫観念から、適当な運動も心掛け、週一回のコーラスでは臆面もなく大声を張り上げている。

こんな老体の日々に、御苦労賞とも思える「とくしま芸術文化賞」、併せて「徳島県表彰」というご褒美が降って沸いた。大器晩成というにはおこがましい老いの成果である。欲しい物が何もなくなったこの年齢になって、褒めていただくことがこんなにも嬉しく心地よいことであるのを改めて知った。

あと、何年皆さまのお役に立てるか未定だが、次は身の引き際をスマートにと、考えている。これも、非常に有意義で、かつ難題なのである。

(昭和30年 学芸学部小学校課程卒)

こころのケアの専門家を目指して ～臨床心理学を学ぶ～



どんなに小さなことでも、私にできることを

徳島大学大学院総合科学教育部2年 とみなが みさき 富永 美咲



私は現在、徳島大学大学院総合科学教育部臨床心理学専攻にて、将来、臨床心理士として「どんなに小さなことでも、困っている方のために、私にできることをしたい」と思い、日々勉学に励んでいます。臨床心理士といえば、みなさんはどんなイメージを持っていますか？ 学校で働くスクールカウンセラーをイメージする方もいれば、病院で働く臨床心理士をイメージする方もいるかもしれません。学校などをはじめ、様々な場所で働いている臨床心理士ですが、私は将来、臨床心理士として特に“被害者支援”に携わりたいと考えています。

事件などの被害にあわれた方・ご家族のための支援である“被害者支援”においては警察、医師、看護師、精神保健福祉士、臨床心理士など、様々な専門家がかかわっています。勿論、専門家だけではなく、私やみなさんのような一般市民の方が被害者支援に携わっていることもあります。私も含め、学生の立場から被害者支援に携わり、自分たちにできることをしているのが“被害者支援につなぐ会TSUNAGU”です。TSUNAGUは、徳島大学の内海千種准教授のもとで、事件や事故、災害などの被害者の支援について自らの理解を深めるとともに、多くの人々に被害者支援について理解・関心をもってもらいたいという気持ちから活動している学生団体です。毎年秋に開催される大学祭にて、被害者支援に関するパネルなどの作成・展示、被害者支援関連書籍の紹介、呼吸法によるリラクゼーションの紹介などを通して、啓発活動を行っています。その他、徳島県警察本部や(公社)徳島被害者支援センターのご厚意で、犯罪被害に関する広報・啓発活動への参加や、講演会の企画・運営に携わるなどの経験もさせていただいております。

私が修士1年生の時のTSUNAGUでの活動としては、平成28年11月に、NPO法人いのちのミュージアム、(公社)徳島被害者支援センター、徳島県警察本部、TSUNAGUメンバーなど、たくさんの方のご協力のもと、徳島大学にて被害にあわれた方・ご家族の想いを届けるアート展“生命のメッセージ展”を開催いたしました。開催に際しては、企画・運営の学生代表を務めることになり、企画を0から考え、実現していくこと、外部機関と連携しながら物事を進めていくこと、TSUNAGUをとりまとめていくことなどの難しさを再認識し、また時には「私では力不足ではないだろうか」と不安に感じることもありました。「企画・運営とあって、臨床心理士と何の関係があるの？」と思う方もいるかもしれません。しかし、こうした活動の中で、臨床心理士として必要である見通しを持って物事に関わること、目的に応じてうまくツールを使ったり、対外・対内で他者と協働したりすることなどを学ぶことができました。不安を感じながらも自分にできる精一杯で取り組んだことで、臨床心理士になる上でも、一人の人間として社会に出て行く上でも、貴重な経験ができたと思います。こうした経験ができたのも、内海准教授をはじめ、関係機関の方々やTSUNAGUメンバーが、私を支えてくれたからこそだと思います。また、こうしたTSUNAGUでの活動の他にも、(公社)徳島被害者支援センターにて、学生ボランティアの1人として、広報・啓発のための配布物の封入作業、講演会などでの受付などの作業をさせていただくこともあれば、中四国で行われる研修会へ参加させていただくこともあります。平成29年4月からは、同センターにおいて学外実習も行わせていただいております。これまで以上に身

を引き締めて、被害にあわれた方・ご家族、被害者支援に携わる方とかかわり、臨床心理学の立場から被害者支援に携わることの難しさや大切さを学んでいます。勿論、臨床心理士になれるように、日々の大学院生としての勉強や実習にも、時にうまくいかないこともあります。一生懸命取り組んでいます。

「事件や事故なんて、私には関係ない」「被害になんて、私はあわない」私もみなさんも、そんな気持ちをもっていると思います。しかし私も含め、いつ、誰が、どこで事件や事故、災害などの被害にあうかはわかりません。もし、みなさん自身や、みな



生命のメッセージ展 in 徳島大学 (平成28年11月)

さんの大切な人が何らかの被害にあった時、(公社)徳島被害者支援センターをはじめ、被害にあった心の痛みに寄り添ったり、日常生活での不安や負担を軽減するために一緒に考えてくれたりする方がいます。残り少ない学生生活ではありますが、「どんなに小さなことでも、困っている方のために、私にできることをしたい」という想いを胸に、大学院での臨床心理士になるための勉強や実習は勿論のこと、TSUNAGUなどでの活動の1つ1つに真摯に向き合い、取り組んでいきたいと思っています。

最後になりますが、この度は徳島大学渭水会々報に寄稿できるという貴重な機会をいただき、誠にありがとうございました。私のこれまでの経験が、みなさんにとって「こんなことしている人もいるんだ!」という発見につながりますように。そして、1人でも多くの人に「私にもできることがあるのかも」と“被害者支援”についての理解・関心をもっていただけますように。TSUNAGUでは、毎年大学祭で、被害者支援に関する広報・啓発活動を行っております。お時間がありましたら、ぜひ足をお運びください。みなさんにお会いできることを、TSUNAGUメンバー全員でお待ちしております。

(平成28年 総合科学部人間文化学科心理・健康コース卒)

徳島大学総合科学教育部 臨床心理相談室のご案内

徳島大学大学院総合科学教育部 臨床心理相談室では、地域の皆さんの様々な悩みについて、相談をお受けしております。相談時間が19時までとなっておりますので、お仕事が終わってからもお越しいただけます。また、お話を伺いする面接室と子どもの相談を行うプレイルームがありますので、お子さんの相談にもご利用いただけます。どなたでもお気軽にお越しください。

職場での悩み	人間関係、心身症、うつ症状など
学校での悩み	不登校、いじめ、非行問題など
家庭内の悩み	子育て、虐待、高齢者への対応など



ご相談の秘密は固く守られます。なお、相談室は臨床心理士の資格を持った教員を中心に運営をしておりますが、大学院生の教育機関も兼ねております。教員の指導の下、大学院生が心理相談をお受けいたします。

【相談時間と料金】

- 1回の相談時間：50分程度（初回は50～90分程度です）
- 相談日：月曜日から金曜日（祝日除く）
- 相談時間：10:00～19:00
- 相談料金：1面接 1,000円

お申し込みの際に、ご相談内容と連絡先をお知らせください。後日、面接日時をこちらからご連絡いたします。FAXとメールでのお申し込みの場合も、お返事は月曜日から金曜日の間になります。ご了承ください。

【相談の申し込み方法】

相談の申し込みは完全予約制となっております。まずはお電話で事務員にお申し込みください。受付時間帯に連絡しただけの場合は、FAXまたはメールにてお申し込みください。なお、FAX、メールによる相談は実施しておりません。

- 臨床心理事務室の電話およびFAX番号 088-656-9849
- メールアドレス（受付専用）soudansince2002@tokushima-u.ac.jp
- 電話受付時間 月曜日～金曜日（祝日除く）の13:30～16:00

臨床心理士の仕事？

いわき はつ み
岩崎 初美

私は臨床心理士の資格を取得し、その後、公務員として仕事をしています。

公務員になってから数年は相談業務や検査業務を担当することが多く、学生の頃に学んだことを生かす以上に、仕事に就いてから学ぶこと・学ばなければならないことの多さを実感しました。相談支援を行うためのスキルアップはもちろんのこと、特に、“公的機関の一職員”としての“バランス感覚”には気を配らなければならないと感じています。

まず、公務員は異動がつきもので、必ずしも相談の終結まで関われるわけではありません。また、一つの機関だけで問題を解決できるわけではなく、関係機関との情報共有や問題解決のバトンタッチをしなければならないことも多くあります。そのため、クライアントとの関わりは、次の担当者に引き継ぐことを前提に考えておく必要があります。こうした状況から、この機関の一職員として何ができるのか、できないことをクライアントにどう伝え、誰にどう補ってもらうのかについても考えるようになり、そうしたクライアントとの距離感を意識して相談業務にあたるようになりました。

また、業務の中には、研修会の企画・運営や研修会講師、関係機関との会議等もあります。こうした業務は、それぞれの機関で働いている支援者のスキルアップ等、地域資源を充実させるためにも大切なものであり、将来的にクライアントの役に立つものであると思っています。公的機関の職員として、目の前の相談ばかりに気を取られすぎず、地域資源の充実に向けた取り組みとのバランスを意識するようにもなりました。

現在は相談業務から離れ、行政事務のみなさんと一緒に、支援者となる方々に対して、法律に基づいた適正な運営をしてもらうことを目的とした様々な

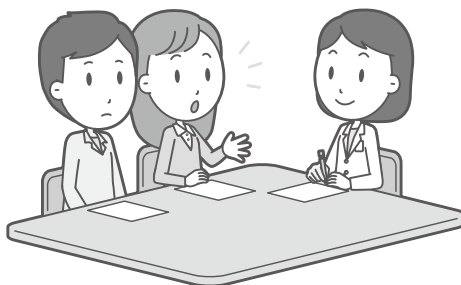
事務を行っています。そのため、これまでなじみのなかった法律を読むようになりました。また、クライアントが活用する地域資源の実情がどのようなものなのか、地域資源に足りないものは何かといった、これまでの相談業務では意識することが少なかった視点を得ることもできました。これらは、今の業務をしていなければ見えてこなかったことであり、今後、直接支援を行う上でも大切な視点になると思っています。

一方、相談業務を行っているときは、クライアントからの感謝の言葉が仕事をする上での糧になっていましたが、今はそうした機会はありません。現場から離れ、毎日法律とにらめっこをしながら書類仕事をしている中、自分のしていることは役に立つことなのかと不安に思うこともありました。しかし、周囲の人との関わりの中で、クライアントが地域で安心して支援を受けるためにも、私たちのような「間接支援」をする人が必要なんだ、と思えるようになりました。これは、公的機関の職員でなければ経験できないことであり、この経験が今後の糧になると感じています。

学生の頃は、漠然と「臨床心理士になって、カウンセリングや心理検査を行う」と考えていましたが、実際に仕事に就いてからは、カウンセリングや心理検査が業務のすべてではなく、臨床心理としての視点から地域福祉のための「間接支援」を考えていくことも同じように重要であると思うようになりました。これまで学んだり経験したりして身に付けた臨床心理士としてのアイデンティティを生かし、自分の置かれた立場でできることをしていきたいと思います。

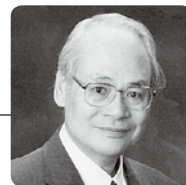
(平成19年 総合科学部人間社会学科心理学サブコース卒)

(平成21年 大学院人間・自然環境研究科臨床心理学専攻修了)



臨床心理学専攻の誕生と発展

徳島大学名誉教授 はまだ じろう 濱田 治良



31年間母校に奉職し平成25年3月に総合科学部を定年退職した者として大学院臨床心理学専攻の歩みを振り返ってみたいと思います。この専攻誕生の出発点は臨床心理士の資格を有する若い一人の助手の先生の着任でした。これは臨床心理学に対する学生の強いニーズに応えるために、それまでは臨床心理士有資格者が皆無であった心理学教室を始め総合科学部全体の決断の賜物であり、平成9年4月の出来事でした。この採用で臨床心理学を学ぶ学生数は予想通り最初から多数を占め、その先生は2年ごとに講師・助教授へと昇任し、心理学教室の一翼を担う存在になりました。そして心理学教室では2種でも良いので臨床心理士の受験資格を出せる体制にしたいという機運が高まってきて、基礎心理学と臨床心理学を並立させるという構想が生まれました。

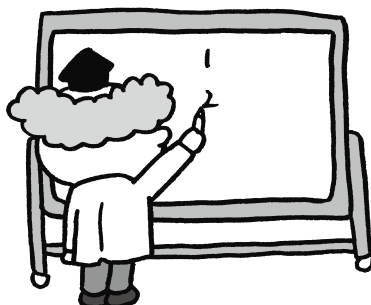
これを模索していた平成13年と14年に基礎心理学の教員2名が他大学へと転任するという事態が生じました。この局面に対して心理学教室では熟慮に熟慮を重ね臨床心理士2種ではなく1種の受験資格を出せる体制を構築しようと舵を臨床心理学に大きく切り変えました。そして総合科学部全体の支援を受けて臨床心理士1種の受験資格を得るために文部省と認定協会との間で交渉を重ね、無事に設置審を通過し臨床心理相談室を併設した臨床心理学専攻が平成15年4月に設置され、同時に認定協会からは臨床心理士の1種校として認定されました。この臨床心理学専攻の設置は総合科学部と大学院にとって大きな出来事でしたが、その設置は当時の石原 徹学部長の多大なご尽力と的確なご判断のお蔭であると深く感謝しています。たとえば臨床心理相談室を1年前

倒して開設したのも学部長の英断によるものでした。

その後、臨床心理学専攻への受験生は多数に上り順調に発展していきました。しかし平成19年に大きな危機が訪れました。すなわち臨床心理士有資格者3名が突然、退職や他大学への転任で欠員状態に陥ってしまいました。しかしこの難局も在来教員の努力により新進気鋭の教員3名を採用することで解消できました。そして平成21年4月にはそれまでの大学院が大学院総合科学教育部に改組され臨床心理学専攻は生き残ることが出来ました。しかし基礎心理学を専攻する教員1名が平成22年3月に定年退職し、その後任は定員削減のあおりを受けて採用できませんでした。したがってこの改組によって臨床心理学専攻は臨床心理士有資格者6名と基礎心理学を専門とする教員1名、合計で7名の体制になりました。そして平成24年には臨床心理相談室に特任助教1名が採用され相談室の強化が出来ました。またその翌年平成25年3月には基礎心理学を専門とする教員1名が定年退職し、その後任として平成25年7月に基礎心理学の教員を採用することができました。

この様に臨床心理学専攻の歩みはゼロからの出発であり紆余曲折を経た困難なものでしたが、その誕生と発展が可能であったのは社会がこの分野を強く求めていることの表れだと思います。本専攻の発足以来既に14年が経過しましたが、その間の修了生は144名に上り全国で活躍しています。いつの時代も臨床心理への期待は尽きないと思われます。今後とも人々が各自の能力と力量をいかに発揮し、心豊かな社会が実現することを望んでいます。

(昭和46年 教育学部小学校課程心理学教室卒)



平成29年度総合科学
優秀賞受賞者の先生に
ご寄稿いただきました

地方創生とハイブリッド・ガバナンス

総合科学部准教授 こたぎり やすひこ
小田切 康彦



筆者は10年ほど前からイギリスにおける地域再生の事例を継続的に調査している。とくに、筆者が注目しているのは、ディベロップメント・トラスト（Development Trust；以下DT）と呼ばれる組織の活躍である。DTの特徴として挙げられるのは、公共施設等の不動産開発・運用で得た資金をコミュニティ開発へ循環させながら地域再生に取り組んでいる点である。

2つの事例を紹介したい。1つ目は、Westway Trust（以下WT）である。WTは、1971年に設立されたイギリス内でも草分け的なDTである。ロンドン西部のノースケンジントン地域を通過する「高速道路高架下」のスペースを、自治体から120年という長期間のリースによって借り受け、そこを開発・管理する組織である。この高速道路高架下スペースは、スポーツ・レクリエーション施設運営、民間企業等へのテナント・スペースの提供、コミュニティ施設の建設・運営などに活用されている。高架下における不動産開発を通じて、地域の諸問題の解決に



図1 高速道路高架下のコミュニティ施設

寄与しているのである（図1）。もう1つは、Caterham Barracks Community Trust（以下CBCT）である。CBCTは、イングランド南東部のタンドリッジ地方で活動を行う組織である。特徴は、廃棄された「兵舎」の活用を通じたまちづくりを展開している点である。1990年、軍縮の影響で兵舎の閉鎖・廃棄が決定され、失業率が急

上昇するなど、住民生活に多大な被害を及ぼした。地域は荒廃する一方であったが、1995年以降、地域住民、不動産会社、自治体などの間で様々な議論が行われ、兵舎を活用した地域再生が進められてきた。CBCTは、残された兵舎を活用した住宅開発、テナント事業、保育所やスポーツ施設の建設・運用等を通じ、地域再生の主体として大きな役割を果たしている（図2）。



図2 兵舎を活用した住宅・事務所等を通じ、地域再生の主体として大きな役割を果たしている（図2）。

筆者がDTに関心を寄せる最大の理由は、地域再生を担う主体間の協働・連携のあり方が実践的に試行錯誤され、その結果としてハイブリッドなシステムが生み出されてきた点である。組織の意思決定機関である理事会には、行政関係者、企業関係者、地域住民等の多様なステイクホルダーが参加する。そして、所有する土地や建物などの管理・運用を通じた営利活動と、福祉や教育といった非営利活動を両立する仕組みが日々模索されている。日本でも、地方創生におけるこのようなハイブリッド・システムの必要性が指摘されている。しかし、それらは理念レベルにとどまっている。私たち住民を含む多様な主体が、相互の長所や短所を理解しつつ、協働あるいは競争できる環境を制度として確実につくっていくこと、そして、それらの実践と評価を続けていくことが必要である。イギリスのDTの事例は、日本の地方におけるまちづくりの行く末を考えるための重要な示唆を与えてくれるのである。

私の職場

総合科学部が創立されて早や30年余。
国内外を問わず多方面の職場で活躍されている
渭水会々員の皆様に、職場の状況や特色、体験談など、
その職場ならではのエピソードを語っていただきました。

フリー
アナウンサー

徳島の魅力をアナウンス

あ べ ひ さ え
安 倍 久 恵



私は元四国放送アナウンサーで、現在はコンサート、式典、講演会などの司会をしています。放送の世界に入るきっかけは徳島大学時代のアルバイトです。NHK徳島放送局放送部に午後5時から週一回3年間通い、記者が外から電話で伝えるニュースを原稿用紙に書き、テロップの写植を打つなどしていました。就職活動として教員採用試験、公務員試験も受けましたが、就職を紹介する人材センターの職員の方から「四国放送が女子アナウンサーを2名採用するから受けてみたら」とすすめていただき、四国放送を受験しました。

四国放送入社後は、フォーカス徳島、徳島市広報番組、ラジオのワイド・音楽番組など担当しました。5年2ヶ月勤務ののち結婚退社、夫の留学のためアメリカ・テネシーで2年半暮らしました。インターナショナルハウスのウイメンズクラブで国や宗教の違いを尊重しながら交流し、文化を紹介しあいました。アメリカにいるからこそ気づく日本や徳島のよさを、もっと伝えられるようになりたいと思いました。帰国後、子育てのかたわら少しずつ仕事を再開し、一つ一つの依頼に取り組んでいます。

打ち合わせでは情報を共有し、私もチームの一員となるよう協力します。原稿は読みやすいようチェックを入れ、車

の中でアエイウエオアオ、ラレリルレロラロと滑舌・発声をしながら会場に向かいます。私は徳島市で生まれ、浜松、千葉縣市川、堺、高松を経て小学3年夏より徳島市在住です。地域ごとに方言・アクセントの違いがありますが、言葉にも音楽のようにテンポ、高低、間、母音も子音も大事にと、気をつけることが多くあります。



おぎゃっと21はぐくみ徳島コンサート

シナリオを自分で作る時は、調べ物に時間が過ぎることもしばしばです。

2017年1月には、うれしい母校での司会がありました。常三島けやきホールで開催された「くすのきしげのり講演会」(P26参照)は、同窓会員が集い和やかな中、くすのきさん自ら絵本を読んでくださり、子どもの心のやさしさ、素直さ、葛藤、勇気など胸に響きました。「ひとりひとりが、みんな大切」。私も小学校で絵本の読み聞かせをしているのでお話の世界に引き込まれ、大人も癒され心温まるひとときでした。

4月9日は鳴門市ドイツ館で「板東俘虜収容所開所100年記念コンサート」。1917年収容所統合により4月6日に板東に到着した徳島収容所の徳島オーケストラは、8日に丸亀から、9日に松山から到着した仲間たちをタイケの行進曲「旧友」などの演奏で出迎えたのです。当時を再現する演奏は徳島エンゲル楽団、合唱は徳島エンゲル合唱団、鳴門「第九」を歌う会で、私は司会とドイツ兵ヘルマン・ハーケが祖国にいる母親に宛てて書いた手紙を朗読させていただきました。いかに音楽がドイツ人の心の支えとなり誇りに思っているかに感銘を受けました。文化交流は続き、2018年6月1日は第九アジア初演100年。コンサートの



くすのきしげのり氏講演会の後、くすのき先生、運営役員の方々と記念撮影



↑ 女声合唱団「ハーモニー佐古」のメンバーとして、全日本おかあさんコーラス全国大会にも出場



↑ とくしまカンタート2016にて。講師の近藤恵子先生に指導のポイントなどをインタビュー



↑ 徳島文理大学むらさきホールで開催された2007年第22回国民文化祭 合唱の祭典。司会をしながら大合唱に加わる

最後は第4楽章の「歓喜の歌」を会場全員で歌いました。

5月20日には「野上彰没後50年記念 アカシア祭」(主催：野上彰の会)が徳島市シビックセンターで開催されました。徳島市生まれで、詩、作詞、訳詞、小説、童話、放送劇台本など才能豊かに活躍した野上の功績を顕彰し、野上の作詞による「落葉松」合唱、訳詞によるボブ・ディランの「風に吹かれて」などが演奏されました。野上が1964年東京オリンピックのために訳した「オリンピック讃歌」は、2020年東京オリンピックでも開会式・閉会式で歌われることでしょう。

6月の「とくしまカンタート」(主催：徳島県合唱連盟)は今年で9回目。県外から著名な指導者を招いてセミナーとコンサートを行います。フィナーレは小学生から一般まで400名を超える合同合唱！ 私はコーラス「ハーモニー佐古」に所属し、全日本おかあさんコーラス全国大会に出場させていただいたこともあり、歌い手と司会者の視点から、出演者の入退場や指揮者にタイミングを合わせた紹介をし、観客にもわかりやすいアナウンスを心がけています。2007年、2012年の国民文化祭とくしま「合唱の祭典」は、おもてなしの心で司会をさせていただきました。

その他にも、高校生の取り組みとプレゼンテーションが素晴らしい『スーパーオンリーワンハイスクール事業及び「NIPPON」探究スクール事業 生徒活動発表会』、恒例のクイズや指揮者コーナーも人気の「徳島交響楽団ニューイヤーコンサート」、次世代育成支援イベント「おぎゃっと21 はぐくみ徳島コンサート」、あわぎんホールでの「夏期阿波人形浄瑠璃大会」や「サロンコンサート」、「徳島市の阿波おどり」、「アスティとくしま 秋の阿波おどり」、「全国阿波おどりコンテスト」、「徳島県立総合高等学校奨励賞交付式・記念講演会」など担当させていただきました。

司会のお仕事きっかけで、新しい世界が開けることもあります。2004年徳島県立文学書道館「モラエスとハーン展」からモラエスが描写した大正時代の徳島を知りまし

た。2012年、父・新田次郎未完の絶筆「孤愁 サウダーデ」を書き継いだ藤原正彦さんの講演会「モラエス、父、私」が徳島大学と徳島日本ポルトガル協会の主催で開催され、藤原ご夫妻と素晴らしい交流となったことも思い出深いです。また現在、徳島県文化財保護審議会委員、徳島県立博物館・鳥居龍蔵記念博物館協議会委員も務めさせていただいております。

司会の仕事を通して学ぶことが多く、“知るは楽しみ”であります。大事な事業の司会をさせていただくことに感謝し、皆様からいただいたご縁を大切に、これからも徳島の魅力を紹介できるよう努めたいと思います。

(昭和58年 教育学部養護教諭養成課程卒)

Profile

徳島市生まれ

浜松市、千葉県市川市、堺市、高松市を経て、小学3年より徳島市在住

1983年(昭和58年) 徳島大学教育学部 養護教諭養成課程 卒業

1983年(昭和58年) 四国放送株式会社にアナウンサーとして入社

1988年(昭和63年) 退社

1993年(平成5年) フリーアナウンサーとして活動再開

1983年徳島大学教育学部卒業後、四国放送に入社し、アナウンサーとして活躍。結婚を機に退社後、夫の留学に伴いアメリカ・テネシー州に2年半滞在。1992年4月に帰国し、子育ての傍ら、フリーアナウンサーとして活動再開。徳島県文化振興財団主催の「サロンコンサート」や「阿波人形浄瑠璃芝居フェスティバル」、徳島県観光協会「とくしま博覧会」、徳島県「全国阿波おどりコンテスト」、「国民文化祭徳島 合唱の祭典」、徳島県合唱連盟主催「とくしまカンタート」、式典、講演会などの司会やコーディネーターを務める。徳島県立総合高等学校「まなびーあ徳島」をはじめとする講座、学校において、講師として指導を行う。また、徳島市佐古小学校「佐古お話の会ミミ」での絵本の読み聞かせボランティアや、コーラスグループ「ハーモニー佐古」で合唱を楽しむなど、幅広く活動している。徳島の自然や文化についての豊かな知識、さわやかで品のいい語り口に、「司会はこの方なくては」というファンも多い。

徳島県文化財保護審議会委員。

徳島県立博物館・鳥居龍蔵記念博物館協議会委員。

進 | 路 | 通 | 信

求人票を送付ください

学生の就職活動の現状と大学支援の強化について

就職委員長 さとう みつひろ
佐藤 充宏

今日の学生の就職活動は大きく様変わりしてきています。バブル崩壊後、就職氷河期ともいわれた2000年前後の低迷期を経て、2010年代にはリーマンショックによる同時不況を乗り越え、ここ1・2年はそれ以前の求人数に回復してきました。総合科学部の就職率も9割前後で落ち着いています。平成28年度の大卒求人倍率は全国で1.73、総合科学部就職率は合計で97.9%になりました。今年はさらに「売り手市場」になると予想されています。

2017年の就職活動は昨年と同様に、経団連加盟企業の会社説明会などの採用広報活動の解禁が3月から、選考活動の解禁が6月からとなっていますが、実際は5月には選考面接試験がピークとなり、6月には内々定を出すという企業も増えています。採用の解禁を守ろうとする大手企業は、3年生を対象にした夏季・冬季インターンシップによって優秀な学生を事前に引き寄せようとするところが増えてきており、3年生時期におけるインターンシップ選びも就職活動の重要なポイントとなってきました。

徳島大学では、全学の就職支援センターとしてキャリア支援室を設置して、県外企業を含めた就職情報を一元化して管理し、各学部の学生就職活動の支援を行っています。総合科学部就職委員会でも、このキャリア支援室の協力を得ながら、総合科学部内に独自の就活サポート相談室を設け、大木キャリアコーディネーターによる就職活動相談や、生協の公務員講座、マイナビの就職講座を組み入れて、3年生や4年生のそれぞれの活動段階に合わせた支援ができるように整えてきました。

昨年から就職活動期間が短くなったため、今年より3年の4月コースガイダンスから就職指導をはじめ、マイナビの就職活動講座を取り入れ、3年前期で企業研究をしたうえで夏あるは冬の「インターンシップ」に参加するように指導しています。後期には、マイナビやキャリア支援室によるエントリーシートの書き方、面接試験対策の講座を開催して、3月解禁の県外の合同説明会や徳島大学内での企業説明会に臨みます。4年生になると4月上旬から企業の前のめり気味な企業採用試験にウェブからエントリーして試験を受けていき、6月の採用選考解禁には最終面接があり内々定をもらう---という約2か月の短い期間での勝負になっています。

公務員希望の学生は、2～3年頃から生協の公務員講座（任意）を受けて準備を進めます。今年の4年は35人、3年は60人が受講して準備をしています。キャリア支援室からも対策講座が提供されます。

教員希望の学生に対しても、全学に教職教育センターを設置し2年生から教員免許取得に向けた指導体制を組んでいます。4年には採用試験対策講座や模擬授業、面接対策講座を開催し、合格に向けた支援体制が強化されています。その結果、平成28年は11人が採用試験にストレートで合格しています。

このように、ゼミ担当教員による就職指導を中心とした支援体制に加え、全学キャリア支援室、学部の就活サポート室、大学生協やマイナビの相談活動や支援講座を有効に組み合わせて活用し、学生ひとりひとりの希望にあわせて円滑に就職活動を進めることができるよう支援体制を強化しています。

ぜひ、渭水会のみならずにも、総合科学部学生に向けた求人票をご送付いただき、就職へのご支援を賜ればと願っております。どうぞ、よろしくお願いします。

【求人票送付先】 徳島大学キャリア支援室 〒770-8502 徳島市南常三島町1-1

Tel 088-656-7635 Fax 088-656-7636 e-mail gkseisyu@tokushima-u.ac.jp

総科のおたから

其ノ五

けやき
欒並木

徳島大学そして総合科学部の開学は、明治7年5月1日に旧徳島城西の丸にあった藩学長久館跡に開校された徳島師範期成学校に遡ります。「期成」とは、ある物事を必ず成就させようと互いに誓い合うことを意味します。現在の渭水会名簿には同校を明治8年に卒業した33名の名前が記されています。すべてはこの卒業生から始まっています。

その後、幾多の変遷を経て明治13年4月16日に徳島師範学校と改称され、明治31年3月19日に徳島県師範学校となり、校舎は明治32年4月1日に現在地に移転されました。そして昭和18年3月1日には徳島師範学校（国立）に昇格し、昭和24年5月31日に徳島大学学芸学部が設置され、次いで昭和41年4月1日に教育学部へと改称されました。

後に総合科学部へと改組された教育学部の時代に、開学100周年を記念して寄附されたのが正門から続く50mほどに及ぶ並木道にある約30本の欒です。これらの樹木は1974年の植樹と思われますが、その正確な日付や寄附者名は失われ不詳となっています。

その欒はすくすくと成長して大木になりました。その間、数10万人あるいは数100万人の学生がこの並木道を往来したと思われます。今後も四季折々に新緑・紅葉・冬枯れへと色彩や姿を変える欒並木の下を、談笑する若人が声を飛び交わせながら行きかうことでしょう。[J]



学生や来訪者を迎える見事な欒並木。
秋には美しく紅葉する



常三島けやきホールの前には
彫刻「水の調べ」が
木漏れ日を浴びて佇んでいる

心に残る風景たちを描く

みね
峯

さち こ
幸子



山道をゆっくりと歩きながら、木々を眺めていると、どんな構図でこのひとを入れたらいいかしらと考えている。すると他の木たちが私も、私もと言うので、「ちょっと待ってね」と言ってスケッチブックを取り出し、ラフに描いてみる。素晴らしい森に入って行った日はもう絵が出来ているので、そのまま描くことになります。この二十年はそんな風にしてモチーフが決まってきたけれど、年を重ねてこれから先、あまり一人で山中を歩く自信もなく、尊敬するエミリー・カー（カナダの画家、1871～1945、馬車でひとり写生した）のように度胸もないので構成の仕方を変えないといけないと考えています。

絵は創るものだと思っているので初めころは人物を配してのCompositionに心を砕いてきました。四国大学で非常勤講師をやりながら、二十年程前から旧社会保険センターで絵画講師を受け持つ事にな

り、水彩画の技法、風景スケッチを勉強するようになったのです。子供の頃から自然への憧憬、生命の不思議に興味があったので私にとって野外スケッチは人物デッサンと並んで最も楽しい訓練になりました。山歩きで出会う木は一本なら肖像画のように、数本なら群像、林や森なら大きな塊となって画面を構成し、支配し、愛しさで頭の中がいっぱいになるのです。自然科学と美術は私の知る限り一体化したもので、自然のありようと人間の関係こそが芸術だと思っています。

子供の頃、やりたい事はたくさんありましたが好奇心と興味、そして直感に従って一番隅っこにあった絵画が一生の仕事になっています。とは言え仕事などと言うのは気恥ずかしく、いったい自分は何者なのか、何をしようとしているのか、問う日々です。



サット・サンガ

山歩きをするようになって木々と語らい水面の映りに心動かされ、木とはどういう存在なのかなぜそこにいて私を捉えて離さないのか。絵は人格そのものです。よりよく生きるための小さな持続する努力こそが制作に反映し影響するのだろうと考えています。天と地の間に木はあり、天は木から大地の美しさとその悲しみを聞き大地は木から天空の教えを知らされる。天と地は木を通して静かに語らい、交信し、その時風は歌い、高い所から低い方へと水は流れ、形を変えながら木の内側を潤していく。水は木となり、木は水なのです。もしくは木は人で水は教育のような気さえするのです。

私は教育の力を信じています。学芸学部附属中学校から学びの歴史は始まり、いつも素晴らしい先生方に支えられて今日までできました。彫刻の坂東文夫先生に美術理論とデッサンを、絵画の吉田昌功先生から制作の姿勢と材料学を学びました。絵を描くという事はということなのか。絵とどう向きあえばいいのか。その後の制作人生に大きく影響し心の支えとなっています。

今、庭にある“私の木”を眺めながら、自分はなぜここにいて絵を描いて暮らしているのかボンヤリ考えます。明確な答えはないけれど確かなことは、これからも絵があれば自分らしく生きてゆけるという事です。

(昭和52年 教育学部中学校課程美術教室卒)



溪



行方



湧水

輝く新星

第3回 渭水会 会長賞

平成26年度に創設された「渭水会会長賞」。

これは、学業成績優秀で研究及び学生としての活動全般において、模範となる優れた学生に対して贈られるものです。

平成29年3月23日（木）、総合科学部1号館第2会議室において表彰式が行われました。



左から吉川さん、石井会長、片桐さん、岩本さん

平成28年度（第3回）渭水会会長賞の受賞者は 片桐麻衣さん（総合理数学科 数理科学コース）
岩本侑姫さん（社会創成学科 地域創生コース）
吉川綾乃さん（人間文化学科 国際文化コース）の3人です。

多くの出会いに支えられた大学生活



かたぎり まい
片桐 麻衣

大学を卒業してまだ数か月ですが、改めて大学生生活を振り返ると、徳島という自然いっぱいの土地で、多くの「出会い」に恵まれ、のびのびと過ごし、じっくりと自分やこれからの人生に向き合うことができた、4年間の自己投資期間であったように思います。

教員免許が取得できる文理融合学部があると聞き、志望した徳島大学でしたが、慣れ親しんだ家族や友人たちと離れ、全く知らない土地での生活で、最初は期待半分不安半分でした。数学の専門的な知識・技能を学びながらも、政治や農業、哲学、理工学といった多くの分野を専門とする友人たちと多くの時間を過ごしました。互いの専門分野を生かした意見を交換し、夜遅くまで社会問題から自分の夢まで、いろんなことを語り合ったことは大学生ならで

はの貴重でとても刺激的な時間でした。様々な考えをもった友人や留学生、先生方との出会いのおかげで入学前に想像していた以上に自らの価値観を広げることができました。

また、大学生活を振り返る中で、「部活動」という存在も忘れられません。私が所属していた陸上競技部では、指導者がおらず、個人競技という理由から、人によって目標もモチベーションも違っていました。そんな中、幹部のメンバーに入れていただき、部を統率する立場を任されたときは、最初はどうもいかないことだらけでした。何度も仲間とぶつかり、挫折しそうになり、涙した日もありましたが、お互いを高めあいながら協力して合宿や大会を成功させたときは、何とも言えない達成感を分かち合いました。また、私個人としては、中国四国大会優勝や西日本・全日本インカレ出場という貴重な機会もいただきました。そんな時も、いつも遠征についてきてくれ、応援してくれる仲間がいました。部活動を通して、私を支えてくれ、人として成長させてくれる仲間に出会うことができました。

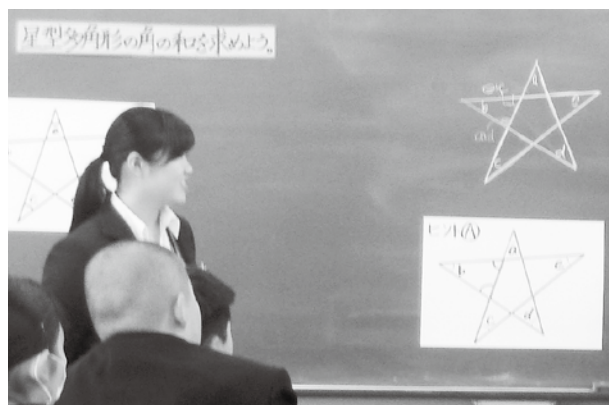
3年次からは、卒業後の進路に向けて、自分と向き合う時間がどんどん増えていきました。私は、夢であった中学校の教師になるため、毎日、大学の自習室で朝から晩まで勉強したことを時々思い出します。勉強をしながら、教師として自分に足りないも



中国四国大会 表彰式

のは何であるのか自問自答し、不安と焦燥感と戦う日々は、非常に辛く厳しいものでした。そんな時に、いつも温かく私を応援してくれた家族や的確なアドバイスを下さり、指導して下さった先生方、共に苦しさを分かち合い、励ましあいながら切磋琢磨した友人たちの存在は何よりの心の支えでした。

大学を卒業し、新社会人として働き始めたからこそ思うことはたくさんありますが、とくに学生の皆さんに伝えたいことは、時間のある大学生のうちにやりたいことは躊躇せず挑戦し、たくさんの人と出会って、自分の中の引き出しを増やしてほしいということです。社会人になると自分のために使える自由な時間というものは限られてきます。自分のために思う存分時間を費やすことのできる大学生だからこそできること、勉強、部活動、ボランティア、アルバイト、旅行…などを通して、多くの知識・経験を蓄え、学生生活を有意義な自己投資期間にしてください。そして、支えてくれる家族、仲間、すべての方々を大切に、感謝の気持ちを忘れないでください。私が今、こうして夢を叶え、兵庫で中学校の教壇に立ってられるのも私を支えてくれた方々全員のおかげであると思っています。まだまだ未熟



授業風景

で、これから多くの壁にぶち当たっていくと思いますが、徳島大学で学んだことを生かし、感謝の気持ちを忘れず、前向きに頑張りたいと思います。

最後になりましたが、渭水会会長賞という賞をいただき、誠にありがとうございました。また、こうして大学生活を振り返る貴重な機会をいただき、徳島大学で4年間頑張ってきて本当に良かったと感じています。徳島大学の卒業生として恥じぬよう、これからも精進していく所存です。本当にありがとうございました。

(平成29年 総合科学部総合理数学科数理科学コース卒)

徳島で、空間情報科学を、学ぶ

私は地域創生コースを卒業しましたが、元々は、法学を学ぶために公共政策コースに入ろうと徳島大学を受験しました。しかし、社会学の授業に感銘を受け地域創生コースに入り、最終的には調査法実習を選択したご縁から、空間情報科学を専攻しました。この度、徳島大学渭水会会長賞を賜る名誉に預かることができたのは、2年生の調査法実習の授業から3年間ご指導いただいた塚本准教授を始め、多くの方の支えがあったからこそだと存じます。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

大学4年間の中で、一番思い出に残っているものは何か、と聞かれると答えに困るほど、たくさんの経験をさせていただきました。総合的に学ぶことが出来る学部の利点を生かそうと、幅広く授業を選択したことで、学問分野が違ってても学問は繋がってい

ると実感し、学問の面白さに気付くことができました。一人暮らしやアルバイト、短期留学、ボランティア、外国の方との交流などからたくさんの知見を得ることができました。

ゼミでは、出身県である鳥取県に、何か関係する研究がしたいと思い、研究を始めました。GISという地理情報を分析するシステムを使用して、4年次研究では、観光ガイドブックに表される場所イメージの内容と空間的範囲の変遷について研究しました。これまで、観光ガイドブックを対象資料として20年間の経年比較をした既往研究はなく、この分量を研究することは大きな決断でした。

論文を書く上で、気を付けていたことは2つあります。1点目は「1本の軸で考える」ことです。つまり、調べたことをすべてまとめるのではなく、最も大



いわもと ゆき
岩本 侑姫

切な「幹」の部分を見極めて貫くということです。調べたことや分析したことは、そのために費やした時間や労力が無駄になってしまうことを避けようという詰め込んでしまいがちです。しかし、その論文で何を明らかにしたいのか、何を伝えたいのかを決めておかないと筋の通らない文章となってしまいます。卒業論文を執筆する経験を通して、1つの軸を意識した論理的な思考が出来るようになりました。

2点目は「思い込まない」ことです。論文を書く上で、シナリオを作り、どのように文章を構成するかということは考えます。しかし、「必ずこの結論にならないといけない」とか、一般的に言われていることをそのものの本質であると見なしてしまうことは研究における柔軟性を奪ってしまいます。書籍やインターネットを調べることはもちろん、現地に足を運んでパンフレットやヒアリングも行うなど、多角的に調べることを心がけていました。

たくさんの方に支えられ、目一杯やり切った良い大学生活だった、と自信をもって言える実り多き大学生活を送ることができたことに、多大なる感謝を



那賀町建物悉皆調査（前列右から2番目）



鳥取市でのまちあるきアプリ作成に向けて

送ります。徳島大学に入り、地域創生コースで学ぶことができて良かったです。本当に、ありがとうございました。

私は今、大学生活を4年間営んだ徳島のために何かしたいと考え、徳島県で公務員をしています。今までお世話になった恩を、これから仕事をする中で少しずつでも還元していきたいと思います。徳島大学で学んだ地理的な視点や、国籍や年齢等を問わず人と関わり得た知見、イベントの開催や勉強、ゼミなどに注力したことによる経験などを、これから仕事に生かしていきます。

これから大学生活を送る皆さん送られている皆さん、勉学にも「頑張る」ことにも終わりはないと思います。満ち足りた毎日を送られますようお祈りいたします。

最後になりましたが、皆様方のこれからのますますのご発展をお祈りいたします。

（平成29年 総合科学部社会創成学科地域創生コース卒）

挑みつづける

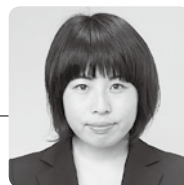
あまりにも密度の濃い5年間であった徳島での大学生活。生まれ育った兵庫から初めて徳島に向かっていた道中、私の目には何が映っていたのだろうか。

どんな学生だったかと言えばどこか落ち着きがなかったように思う。がむしゃらに興味のある事は時間を惜しむことなくまずやって過ごした大学生活

だった。部活、勉強、アルバイト…。様々なことを経験する中で私に大きく影響したことが二つある。

一つは、海外へ行った事だ。大学になってから、20カ国以上の国を旅した。その中には個人的な旅行もあったし、長・短期での留学プログラムに参加したこともあった。何でも幼い頃から「違う」ものに興味があった。例えば、言語が違うことであった

よしかわ あやの
吉川 綾乃



り、文化が違うといった具合だ。それが何なのか知りたくて海外に赴いた。中でもスウェーデンのルンド大学に交換留学した事は忘れられない経験だ。印象的だったのがAnimal Studiesという授業である。日本では、肉も魚も野菜も何でも食べる人がほとんどだがスウェーデンのみならずヨーロッパではベジタリアンやビーガンの人が多い。その背景には宗教観や思想など様々なことが起因している。その上、動物の倫理や権利など日本とは違う考えを持つ人が多くいる。猫カフェといった今や日本では当たり前のことも授業内でのディスカッションで少し驚かされたことが記憶にある。「当たり前」って何なのだろう。「普通」って何なのだろう。日本から離れてみることで色んな新しいことを全身で感じる事が出来た。またスウェーデンで出会い、話し合い、食事を共にした仲間と出会えた事は人生において大きく影響している。

二つ目は、映画だ。テレビっ子ではあったが、普通に映画が好きな程度であった。だけど大学一年の終わりくらいに、とても興味が湧き始めた。目で、心で楽しませてくれた。時に、誰かのセリフが人生の指南となった。この想いを誰かとこの時間を共有できないか、そして新しいカタチでそれを実現出来ないか考えた時、野外で映画を上映しようと思った。多くの人の協力を得ながら、満員で無事終えることが出来た。想いをカタチに出来ること、特別な時間を誰かと共有できることの素晴らしさを実感することが出来た瞬間であった。



満員御礼となった野外映画祭

卒業した今、私は世界の人々の健康に貢献することを「物流」を通して日々様々な問題に向き合っている。私たちの仕事は、止まってはいけない。止まってしまうと、必要としている人の元へ届かなくなる。そして日々変化していく世の中に合わせて変



日本語を習っているスウェーデンの学生と留学先で知り合った日本人留学生とでピクニックへ

化し続けなければならない。だからと言って、ただ届けばいいというものでも無い。安全で、安心して使っていただくためにしっかりと目配せを怠ってはいらないのだ。何か問題があれば改善する事に努めなければならない。仕事を始めた当初は、日々めまぐるしく過ごす事で精一杯だった。気持ちでも余裕を持ててきた今、大切にしている姿勢がある。それは「自分にしか出来ない仕事」をすること。私は、表現したり、伝えたりすることが好きだ。それをどう仕事で活かすか日々工夫して実践をしている。自分が何を好きで、何が得意でという事は大学生活色んな事をする上で、少しずつ分かってきた。まずやってみること。その姿勢は今も変わらず貫き続けている。これからも可能性をさらに広げていくためにも挑み続けていきたい。

(平成29年 総合科学部人間文化学科国際文化コース卒)

徳島大学総合科学部涓水会会長賞表彰要項

(目 的)

第1条 研究活動及び学生としての活動全般について優れた者を表彰する。

(表彰人数)

第2条 学部生3名、院生1名とする。

(表彰者の選考)

第3条 学部生は4年次前期終了、院生は修了・退学時の前期終了までの研究活動・社会活動・成績等に基づいて行う。

第4条 次の基準に該当するもの。

- (1)研究活動・社会活動等で優れた業績を有する者
- (2)GPA上位者

(表彰の決定)

第5条 表彰の決定は、学部長が招集する選考委員会で協議し、涓水会会長に推薦し、決定する。

(表彰の時期等)

第6条 表彰は、学部生においては4年次後期、院生においては修了・退学時の後期に涓水会会長が行う。
副賞として1名につき5万円を給する。

(要項の改廃)

第7条 この要項の改廃は、総会の議によって行うものとする。

附 記 平成29年5月27日(土)の総会で決定し、平成29年度より実施する。



Report 徳島大学総合科学部設置30周年記念

児童文学作家 くすのき しげのり講演会

「一人一人が、みんなたいせつ ― 作品に託す願い ―」



泣いて、笑って、心洗われるひととき

2017年1月28日(土) 14時より、地域連携プラザ「常三島けやきホール」にて、児童文学作家 くすのきしげのり先生の講演会(主催/渭水会 共催/徳島大学総合科学部)を開催しました。

くすのき先生の出身地・鳴門の鳴門市立図書館の児童室の一角には、先生の全著作が揃う「くすのきしげのりコーナー」があります。子ども達がいつでも先生の本にふれあうことが出来るようにと、このコーナーの本は貸し出し禁止。ところが、図書館のご厚意で、この日、「くすのきしげのりコーナー」がけやきホールのロビーに出張! また、平惣さんのご協力で「くすのきしげのり書店」も設営されました。

石井会長、平井学部長のご挨拶に続いて、いよいよ講演。海外出版もされている先生の代表作『おこだでませんように』や『Life』、『ふくびき』、最新刊『あなたの一日が世界を変える』などの朗読をはさみながら、そ

石井会長も旧知の間柄。先生のご活躍や人柄を語ってくれました



作者自らの朗読と解説で楽しむという、ぜいたくな体験



講演会後のサイン会には長蛇の列。中には県外からの参加者も



あたたかく真摯で、ちょっとお茶目。絵本の世界そのままの先生の人柄に、参加者一同ファンになりました

れぞれの作品に込められた願い、執筆にまつわるエピソードなどを話してくださいました。子どもたち一人ひとりの心を見つめることの難しさ、他人の心を想像し共感することの大切さ、そして、大病に倒れたことがきっかけで自分を見つめ直したこと——経験から紡ぎ出される先生の言葉は、参加者の胸に深く響きました。

2017年はくすのき先生の作家デビュー30周年のメモリアルイヤー。9月から全国の書店で記念フェアや講演会が開催されています。この機会に、くすのきワールドをぜひ体験してみてください。

参加者から寄せられた感想の一部をご紹介します

- ◆ 絵本は子どもが読むと思っていました。大人になって読むと、忘れていた「心」を思い出させてくれたり、温かい気持ちになりました。心を育てることは歳を重ねても、いつまでもできること。これからも絵本にふれていきたいと思いました。とても勉強になりました。
- ◆ すばらしい講演ありがとうございました。くすのき先生の作品に対する思いに共感しました。先生の今まで生きてきた経験や体験がベースになっていること、教職経験から子どもたちや周りの大人に対する思いが詰まっていることを感じました。
- ◆ 遠方よりの参加を迷いましたが、今日の2時間で私の今後の人生に対する考えが大きく変わりました。色々かつらいことがあって手放しかけた人生でしたが、今から前向きに生きたいと強く思うようになりました。本当に貴重な出会いでした。
- ◆ ひとりひとり心も違う。思うこと、抱く感情、立場や目線が違えば、いろんな形が生まれる。そのどれもが大切なのだと改めて考えさせられました。絵本の登場人物が、そこで生きていて、日々生活していて、成長し、つながり、過去があって将来がある。まるでご近所の知人の人々のように感じます。
- ◆ 「人生には順風と逆風があり、逆風の時にも向かい合っていれば、凧のように上にあがる時もある」という言葉に勇気をいただきました。大好きな絵本『Life』の作者ご本人の朗読を聞かせていただいて、とても感激しました。ぜいたくで充実したひとときをありがとうございました。

スタートライン

S T A R T L I N E

「なんとなく」

大阪大学大学院 生命機能研究科 生命機能専攻 医化学研究室 ながい こうた 永井 航太

私は平成29年3月に徳島大学総合科学部社会創生学科環境共生コースを卒業しました。高校までとは異なり、大学生活は自由な時間が多く、勉強や遊び、アルバイト、部活など様々なことにチャレンジできたと思います。縁もゆかりもない徳島に移り住み、慣れない一人暮らし生活を始めたことがつい昨日のように感じるほどで、あっという間の4年間でした。大学生活が短く感じたということは、それだけ充実した日々を過ごしてきたのだと思います。

スタートラインというテーマですが、大学4年間の中で、私はどのような活動も「なんとなく」から始めてきました。「なんとなく」と言うと聞こえが悪いかもしれませんが、物事を始めるにあたり、動機は「なんとなく」で十分だと思います。現在私は大阪大学大学院でエネルギー代謝に関するタンパク質について研究していますが、大学院進学を決めたのも「なんとなく」でした。周囲の友人の多くが就職活動や公務員試験、教員採用試験に励んでいたのも、「なんとなく」私はみんなとは違う道に進みたいと思ったのです。徳島大学総合科学部は文系理系の垣根が低く、幅広い分野を勉強できるのが特徴でしたので、「なんとなく」の思い付きから新しい

ことにチャレンジしやすい環境だったと思います。

重要なのは「なんとなく」決断した後、何をするかだと思います。私の場合、2回生の春頃に大学院進学を「なんとなく」決めましたが、何を勉強すれば良いのか分かっていません

でした。そこで、インターネットで情報を収集したり、先輩や先生の話の聞いたりすることで、勉強すべきこと、取り組むべきことが徐々に形となって見えてきました。それに伴って講義を蔑ろにせず、より一層知識を習得しようと考えようになりました。このように私の場合は勉強ですが、今置かれた環境で自分のできることを、手を抜かず取り組むことは何事においても重要だと思います。自分で決めたことを達成するため、考えるだけではなく行動に移すことの大切さを感じました。

しかし、結果が得られなかったからと言って自分の取り組んできたことが無意味になることは決定的ではないと思います。予定していた通りに物事が上手くいくことは稀です。私も元々は教員になりたくて徳島大学総合科学部に入学しました。結果として現在は大阪大学大学院に所属しており、教員になるという当時の夢は叶っていません。しかし、私自身全く後悔していません。そのくらいフレキシブルで良いと思います。明確な理由もなく「なんとなく」スタートを切り、自分のできることに全力を注ぐことが重要です。学生の皆さんへのメッセージになりますが、勉強に限らず、大学は何事にも「なんとなく」チャレンジできる絶好の機会です。想像もしていなかった自分に出会えると思います。結果を気にせず、まずは「なんとなく」始めましょう。

最後になりましたが、「なんとなく」学生生活を過ごせたのも多くの先生方、友人、先輩、後輩、そして家族の支えがあったからだと思っています。多くの人に支えられていることを忘れず、今後も「なんとなく」生きていこうと思います。

(平成29年 総合科学部社会創生学科環境共生コース卒)



徳島大学での6年間を振り返って

たかおか みさき
高岡 美沙希

私は平成29年3月に徳島大学大学院を卒業し、4月から地元である岡山県の市役所で社会人1年目をスタートさせています。社会人となって早4か月が過ぎ、新しい環境にも少しずつ慣れつつありますが、ふとした瞬間に徳島で過ごした6年間を思い出します。

徳島での日々を振り返ってみると、徳島大学で過ごした6年間は多くの人と出会い刺激を受け、成長することのできた貴重な時間だったのではないかと思います。

小さいころから運動をすることが好きで、高校3年生の夏に進路で迷っていた時、漠然と「スポーツに関する勉強がしたい!!」と思ったことから、徳島大学総合科学部への進学を決めました。総合科学部ではスポーツだけではなく、心理学や語学など幅広い分野の知識を学ぶことができ、周りの友人も様々な分野に興味を持っていることから、毎日刺激を受け、自分の知見を広げていくことができました。

またプロスポーツチームでのボランティア体験・試合観戦や、地域に出て活動する機会も多くありました。子どもから高齢者まで幅広い世代の人たちと関わりを持つことができたと同時に、スポーツを「する」楽しさのほかに、スポーツを「みる」楽しさや「支える」楽しさを感じ、スポーツを新しい視点から捉えることもできるようになりました。

私が大学院進学を決めたのは、学部4回生の夏頃でした。3回生からスポーツ社会学研究室に所属し、かねてから興味があったスポーツ少年団について研究を進めていく中で、もっと勉強して様々な知識を身に付け研究をしたいという気持ちが大きくなっていました。当時就職活動もしていたため、進学か就職かでとても悩みましたが、先生や友人、両

親など多くの人に支えられ大学院への進学を決意しました。

大学院の2年間は、ボランティア活動や学会発表、授業など、徳島で過ごした6年間の中でも特に忙しく、あっという間に過ぎていきました。卒業研究に引き続き「スポーツ少年団の子どもの保護者に対するフェアサポート学習システムの開発」について研究に取り組みましたが、2年間で研究をやりきったと胸を張って言うことはできません。しかし、教授の推薦もあって財団法人康楽会の康楽賞を受賞したことは私にとって大きな財産となっています。大学院に進学した直後は周りの友達の多くが大学卒業と同時に就職していたため、新しい場所で頑張っている姿や仕事の話聞いた時には、焦りや不安を感じることもありましたが、大学院での2年間は私にとってとても意味のあったものだ自信を持って言えます。そして学部時代も含め4年間指導して下さった教授にとっても感謝しています。

現在は市の職員として働くと同時に、地元のスポーツ少年団で子どもたちにバレーボールを教えています。指導者1年目をスタートさせていますが、指導する難しさを実感し、これまでで身に付けてきた知識よりもさらに多くのことを学ぶ必要性を身に染みて感じています。

社会人として指導者として未熟ですが、これから成長していくために様々なことに興味を持ち、徳島大学での6年間を無駄にしないように、積極的に学び続けていきたいと思っています。そして徳島大学で得た人脈は私にとってかけがえのないものであり、これからもその繋がりをなくさないように大切にしていきたいと思っています。

(平成27年 総合科学部人間文化学科心理健康コース卒)

(平成29年 大学院総合科学教育部地域科学専攻修了)



|エ|ッ|セ|イ|

目指すべきところ



と い ぐ ち か ず た け
渡井口 和 豪

プロフェッショナル。

この言葉を聞くと、高い専門性とスキルを持ち、完璧に仕事を遂行するというイメージを思い浮かべる。

先日、何気なくブルーレイレコーダーを操作していると気になる録画を見つけ、再生ボタンを押した。画面に映し出された文字は「暮らしに潜む危機を救う」というものだった。録画した記憶もないその番組は、日本のインフラを支える職種の中でも特殊技術を用いて高所作業を行うプロフェッショナル集団について。かつて高度経済成長期に造られた橋梁・橋脚のうち約2割が50年を超えるという。日本には約70万という数の橋梁が存在するといわれるから2割という数字がいかに膨大なものであるか。プロフェッショナル達は、それらの安全性確認と維持管理を目的とし手作業で点検していた。

格好良い。とにかく格好良い。大学・大学院時代にお世話になったボスには「子供の感想か!」と愛情に満ち溢れた^{のし}罵りをいただけそうではあるが、ただ純粋にそう感じた。番組を見終えて、少しばかりの興奮と憧れと羨まし^{うらや}さの混じったような気持ちに浸っていたが、考えてみればプロフェッショナルと呼べる人物は、自分の周りにもたくさんいることに気付いた。

もう30年程の付き合いになる友人は、パティシエとしての手腕を存分に揮って有名ホテルのスイーツ部門を統括している。趣味のトライアスロンで顔を合わせる学生時代の後輩たちはドクターとして命と向かい合い、多忙な毎日を送っている。まだまだ紹介できそうだが、プロフェッショナルとは、^{ふかん}俯瞰で世の中を見れば実に多くの人々が該当するもので、多種多様な職種において存在し、持てる技量を駆使して仕事をされている人は、誰でもプロフェッショナルと呼べるような気がしてくる。



訓練会での一コマ

私は大学院修了後、消防士の道を進み始めて12年になる。その間には様々な火災や救急・救助事案に出動

したが、自分の仕事を振り返ってみると果たしてどうだろうか。もっとできたんじゃないか、という思いは常にある。だからこそ悔しい^{くや}想いをフィードバックし、成長の糧としてきたわけだが、プロフェッショナルというにはまだまだ知識も技術も経験も足りないと感じる。例えば消防隊の活動を挙げるならば、建物火災発生時、速やかに鎮圧することはもちろんであるが、その過程において対象物は木造なのか鉄骨なのか。要救助者はいるのか、いないのか。火災や煙の性状から内部への侵入は可能か不可能か。延焼の危険はあるのかどうか。これら以外にも状況は刻々と変化するし、同じ現場は2つと存在しないことから各現場に応じた戦術をとる必要がある。また現場活動を支える裏方として通信業務、各種事務作業や関係機関との調整も忘れてはならない重要な業務であり、消防という仕事一つを紐解いてみても、その中にはこれだけの専門性を求められる。プロフェッショナルの壁は高い^{ひる}なと怯みそうになるが、そんな時はある言葉を胸に気持ちを奮い立たせている。

それは「屠龍技(とりょうのぎ)」という言葉である。昔、中国のある村に現れた龍を退治すべく、その技を身に着けた者が居たが、その後龍が現れることはなく、役に立つことはなかったという故事に由来するものである。消防の仕事はまさにこの通りで、いつ発生するかわからない災害に対して知識を得て、技を磨き、常に研鑽を積むが、それが無駄な努力であってほしいと願うものだ。何事もなければ平和を喜び、ひとたび災害が発生すれば想定外なく身に付けた技で龍(=災害)を倒すというもの。

今年で37歳。「公務員」という側面から認識されることが多い消防という職業であるが、もっと泥臭く、無駄になるかもしれない努力に全力を注いでいきたい。「消防のプロフェッショナル」になるために残された時間はあと23年(仮)。

皆さんの目指すべき「プロフェッショナル」とはどのようなものですか？

(平成15年 総合科学部人間社会学科人間行動研究コース卒)

(平成17年 大学院人間・自然環境研究科人間環境専攻修了)



|エ|ッ|セ|イ|

音楽は心の癒し

月の美しい夜、この原稿を書いています。チェンバロリサイタルまで丁度2ヶ月。J.Sバッハのフランス組曲、イギリス組曲全曲演奏会の2回公演という企画で現在準備中ですが、関西の徳大OB、OGの方々に是非お越しいただけたら幸いです。

ピアニストになりたいと思ったのは、中学時代、友人と話していたときでした。高校で進路を考える時期、東京の音大に行きたいと秘かに考えていましたが、都会は犯罪の^るつぼだとか、ピアノの置ける防音マンションと音大の授業料は経済的に無理だと言われ、実力を試すチャンスすら与えられませんでした。兎に角、地元国立大学に現役で合格するように言われ、滑り止めも受けさせて貰えませんでした。当時は大鳴門橋や明石海峡大橋も無く、四国は本州と殆ど隔絶されていました。携帯電話やインターネットも無い時代で、受験の情報は専ら「蛍雪時代」という受験雑誌から得ており、その分厚い雑誌には、徳島大学教育学部中学校教員養成課程(音楽)定員4という無機質な情報が一覧表に載っているだけでした。定員がたったの4人で、カリキュラムもよく分からず興味が持てませんでした。進路に悩み悶々としていた時、子供の頃からお世話になっていたピアノの先生から、徳大の音研の教授陣は芸大出身の一流の先生方で、芸術として専門的なピアノレッスンや音楽、作曲、音楽史などの授業が受けられるということを聞き、俄然やる気が出ました。共通一次試験の5教科7科目と、二次試験の実技試験にはピアノ(古典派ソナタ)、イタリア歌曲、新曲視唱、聴音などがありました。



2017年5月28日 東灘区民ホール・うはらホール

ちばまゆみ (旧姓 安藝)
千 葉 真由美

無事合格出来た時は嬉しかったです。小学校課程からの副専攻の4人と合わせて音研同級生は倍の8人。今振り返れば、少人数の学生に対し、



自宅サロンコンサート会場 リーフホールのチェンバロ

手厚い教授陣に丁寧にご指導いただけて、友情も育みつつ、とても伸び伸びと学生時代を送れたことは、私にとって理由無き自信に繋がったのではないかと思います。音楽をもっと学びたい一心で、徳大卒業と同時に開校した鳴門教育大学の修士課程へ進み、更に2年間修士演奏と修士論文に専念しました。

その後結婚して関西に移り住み、ある日、私の中のプロの演奏家に対する捉え方が変わりました。背中にヴァイオリンケースを背負い、自転車に跨り、颯爽とスタジオ録音やライブハウス、そしてまた大ホールへと日常的に仕事に出掛けて行く人物を目の当たりにしたのです。彼女はそれで生計を立てている。歴としたプロなのだ。その時、一気にプロが身近なものに感じられました。「私も絶対プロになる」という心の声を聞いたのです。

ある著名な演奏家が「プロなんてものは、本人がこれでやっていくと決めた瞬間プロなんだ。コンクールで優勝なんてしなくても、僕は今ではコンクールの審査員をしているよ」と話したそうです。響きました。

私は15年ほど前からチェンバリストをしています、おかげさまで、自転車の彼女とは今では一緒に仕事をしています。チェンバロはバロック音楽には欠かせない鍵盤楽器です。チェンバリストとピアニストの二足のわらじを履くのは結構切り替えが大変ですが、其々の楽器でオケに客演させて貰ったりしています。徳島では今

年1月に花杏豆でライブを開催し、故郷のお客様に聴いていただけて感激しました。5月には豪華客船ぱしふいっくびいなすの2週間の日本一周クルーズに演奏家として乗船出来た事は音楽を生業としている実感を得られました。

終わりに、現代社会は災害や紛争、自殺、いじめなど様々な問題を抱えています。音楽ほど心を浄化させ、心の傷を癒せる物は無いと確信しています。私も微力ではありますが、聴く人の心に響く音楽を演奏出来るよう日々精進して参ります。

<https://www.mayumiklavier.com/>

(昭和61年 教育学部中学校課程音楽教室卒)

Chiba Mayumi
Cembalo Recital

千葉真由美
チェンバロリサイタル

JS.バッハ フランス組曲 全曲演奏会
イギリス組曲 (全2回)
癒しの音色、音楽の喜びをあなたに!

第1回 2017年10月11日(木)
イギリス組曲第1集 全曲演奏 BWV 806
フランス組曲第1集 全曲演奏 BWV 812
フランス組曲第2集 全曲演奏 BWV 814
フランス組曲第3集 全曲演奏 BWV 815
イギリス組曲第1集 全曲演奏 BWV 807
イギリス組曲第2集 全曲演奏 BWV 808

第2回 2017年10月12日(金)
フランス組曲第4集 全曲演奏 BWV 816
フランス組曲第5集 全曲演奏 BWV 817
イギリス組曲第3集 全曲演奏 BWV 809
イギリス組曲第4集 全曲演奏 BWV 810
イギリス組曲第5集 全曲演奏 BWV 811

チケット
前売 3,000円
当日 5,000円
会場 (8,000円)
TEL 090-8800-0000

Confetti (コンフェッティ)
TEL 090-8800-0000
会場 (8,000円)
TEL 090-8800-0000

開演 16:00 (開演 13:30)
RINKO MUSIC LEAVES
TEL 090-8800-0000

後援 日本チェンバロ協会 主催/お母さん セミナー・ミュージック 090-8800-0000



|エ|ッ|セ|イ|

博士号取得までの10年間を振り返って

たな だ のり お
棚 田 教 生



平成28年3月23日、徳島大学常三島キャンパスで、私は念願であった博士の学位記を授与されました。その場には、6年間にわたる学位取得までの道のりを全面的に支えてくださった浜野龍夫教授と家族の姿もあり、私はこれまでの長く、紆余曲折があった過程を振り返りながら万感の思いで学位記を受け取りました。

私は平成11年度に徳島県職員となり、水産職として県庁や水産研究所で勤務してきました。広島大学時代は魚類の生態を研究し、修士まで取得していましたが、就職後は特に博士号に対する強い思いはありませんでした。転機は、研究所から県庁に再び異動になった平成18年度に、それまで仕事を通じて交流があった大学の先生から博士号取得の話を持ちかけられたことでした。結局そのお話は、受験して入学までしたものの、家庭の事情から断念することになったのですが、一度意識してしまった博士号のことは、その後私の頭から消えることはなく、博士論文の研究テーマや構成などを具体的に考えるようになりました。

そして、平成22年度から、総合科学教育部の浜野

先生にお世話になることになりました。仕事をしながら夜間に授業を受けて単位を取り、3年後の平成25年度末には必要な単位は修得できたのですが、仕事が忙しくなったこともあり、この間、研究論文は結局1報も出すことができませんでした。その後も時間は無情にもどんどん過ぎ、タイムリミットの平成27年度末までに学位を取得することはもはや困難な状況になってきました。小さな子供が2人いる家庭を犠牲にしながら、思うように作業が進まないこの生活をもう断念しようと思ったことは何十回もありました。ただ、もしここで諦めてしまったら、今後ずっと「博士号を取れなかった」後悔を抱えて生きていくことになることは自分でも容易に想像できました。そして平成26年も終わろうとしていた頃、残り1年で論文を3報書いて学位論文も仕上げるなどなどどう考えても無理だと頭ではわかっていたものの、とにかく時間切れでアウトとなるまでは、やるだけやってみよう一念発起しました。それまでの5年間で何度も迷っては変えることを繰り返した研究テーマも、「ワカメの種苗生産と品種開発に関する研究」でいくと腹を決めました。しかし、とは

言っても、その後の作業が急に簡単に進むはずもなく、やはり無謀な挑戦だったかと悲観したこともありました。ところが、1つめの論文が平成27年6月に受理されてから徐々に風向きが変化し、続く2報目も9月に受理されました。学位論文の原稿も年末に徹夜で仕上げて何とか締切に間に合い、翌年2月に開催された公聴会には職場の関係者も聴きにきてくださり、それも力に変えて乗り切ることができました。そして、奇跡は起き、遂に博士の学位を取得できるに至ったのです。

博士号は、個人に対して授与されるものですが、本人の能力や努力だけで取れるようなものではありません。何とか私に学位を取らせようと最後まで研究の指導とお世話をしてくださった浜野先生はじめ大学の先生方、社会人での学位取得に対する全面的な理解とサポートをくださった職場の方々、学位取得の重要性を説き、温かく励まし

てくださった内外の先輩研究者の方々、さらに、いつも深い理解をもって支え続けてくれた家族、これら多くの方々の強力な後押しがなければ、最後の1年間に起こった奇跡は絶対になかったと断言できます。その意味では、この博士号は、長年支えてくださった方々との様々な思い出が詰まった特別なものであると感じています。

現在は、10年にも及んだ博士号のことを考えながらの生活から解放され、思う存分研究に打ち込める環境になりました。これまでの迷走した経緯はどうであれ、徳島県を代表するブランド水産物であるワカメの博士になった以上は、その名に恥じないような研究者となり、徳島県の水産業に役立つ研究成果を挙げていくことによって、お世話になった方々へ恩返しをしていきたいと考えています。

(平成25年 大学院総合科学教育部博士後期課程単位修得後退学)

(平成28年 大学院総合科学教育部地域科学専攻 博士(学術)取得)



|エ|ッ|セ|イ|

草創期の恩師を偲んで

やま だ ひで お
山 田 秀 雄

英文学の浅地昇先生しょうしょうは少々お年を召された方に見えて、白鶴の如き気品を備えておられた。そして生徒の机間を巡りながらゆっくりと講義を進められた。短い期間ではあったが僕たちのクリスマス会の相手をして下さったり、シェイクスピアへの方向づけをして頂いたりもした。

「君たちには『十二夜』と『ソネット集』から入ったらと薦めたい」とおっしゃったことと、「シェイクスピア演劇は儂くも消えんとする中世文学の最後の輝きなのだ」と言われたことを僅かに我われは覚えている丈だった。

その後この二つの作品を覗いては見たものの、何れも到底僕たちの手に負えるような代物ではないことを悟ることになるのである。

————— 当時の劇場 —————

その頃の劇場の形態がどのようなものであったかは全く不明なのだそうで、分かっているものも当時の台本に記されたト書きや描写などからの推測なの

だそうである。だから版画等に描かれた劇場の外形は学者たちの研究には有力な手掛りとなっていて、とくに1594年以降シェイクスピアが属していた劇団の本拠であった地球座が1616年のヴィッシャー署名の銅版画に明瞭に描かれていたことは後々の研究者にとっては誠に有益であったということである。

劇団は当時宿屋の中庭を借りて上演していたが、やがて大きな宿屋は上演専用の舞台を中庭に作ったりもした。その後劇団が専用の劇場を持つようになってからも、この中庭様式が引き継がれていった。

舞台は中庭に突き出させ、低額の1ペニーで入場する者は正面の芝生で立ち見をし、金持ちは追加料金を払って草葺き屋根のある座布団付きの客席に座った。そして周囲から舞台を見下ろすという一種の円形劇場の形をとった。舞台装置は簡潔で象徴的。我が国の能舞台との類似性を指摘する人もいる。

午後2時には屋根の上に上演を知らせる絹製の幟

を立てて劇が始まった。一般客は陽気で騒がしく、始まってもなかなか静まらず、至る所で野次をとばし、不満な出しものや演技には容赦なく罵倒を浴びせかけた。

市長や市議員たちは劇場を目の仇にした。彼等は清教徒と一緒に宗教上・道徳上の理由を掲げたが、実は劇場が世相の風刺などを通して政治上の問題を起こしたり、治安に手を焼かせたり、或いは有名な悪疫の源であると考えられたりしたからであった。清教徒も初めは極めてささやかな宗教団体で、せいぜい舞台上で皮肉られる程度であったが、彼等の方の演劇嫌いは徹底していて、市当局と通じて次第に勢力を拡大するにつれて劇場との対立は深刻化して行った。“聖なる日曜日に嘘と冒瀆の娯楽は許せない”という理由もそうであるが、それよりももっと本質的な、清教徒の娯楽や芸術に対する極端な無知・無理解に由来するものがあったのだ。

——— シェイクスピアと大衆の出現 ———

当時の観客が演劇で求めたものは何よりもリアルな興奮だった。城の攻防や戦闘場面がラッパの音や太鼓、そして剣の響きと共に展開され、多くの兵士が傷つき殺された。そんな場面を手汗握って見るのは市民たちのこの上ない感動であった。これは遠くブリテン・アングロサクソン以来の血で血を洗う抗争によって蓄えられたDNA遺伝であろう。

彼等は実際に剣戟などをよく知っていて平凡な立ち回りなどでは満足しなかった。役者の方も軽業師のような動きや演技を磨き、演出上の工夫を凝らさねばならなかった。迫真が過ぎて刺され命を落とした役者もいた。嵐の場面になると天井からは小道具係が雷を鳴らし稲妻を走らせ、剣を上から振って神の警告を示し、又雨や風の効果音も使った。

亡霊となって立ち現れる王、律法や道徳を平気で踏みつける利己的な軍人、恋のためには一命を捨てても顧みない恋人たち。それらの人間像は何れも庶民生活における現実的な存在でもあったのだ。

観客の心を十分に知り尽くしていたシェイクスピアは有り触れた物語に現代的な生命を与え、演出にも新しい工夫を加えて観客を喜ばせたが何よりも“ことば”の力によって民衆の心を言わば虚と実・皮膜の間に誘い込んだのであった。

奇抜な表現と快い韻律、格調高い表現と駄洒落、何れもロンドンっ子の、というよりは人間の心をよく知っていたシェイクスピアの得意とする所であった。

そしてなまじ手の込んだ演出よりも彼の思い掛けない一言の方がより場面を効果的にしたのである。

「だれか馬をくれ、代わりに国をやるぞ！」

この簡潔でスピード感のあるリチャード王の台詞に観客は沸き立ち、熱狂の拍手でこれに応えた。劇場の外ではこのような言い回しは流行語として人々の口をついて出たし、作家連中はそれを勝手に自作に取入れて人気取りの材料に利用する始末だった。

1642年清教徒革命による劇場封鎖まで、あらゆる弾圧にも拘わらず演劇がルネッサンス演劇時代の隆盛を見たのはエリザベス女王とジェームズ王とが続いて無類の演劇愛好家であって、事あるごとに保護の手を差し伸べて来たからでもあった。これは単に支配者たちの個人的な恣意のみではなかった。つまり女王も含めたイギリス市民が自らの歴史への参画を謳歌しつつ一つの文化が推し進められた、いわば「イギリスルネッサンス」の成果に他ならなかったのである。

シェイクスピアの創造したものはたしかに30数編の劇や詩ではあったがしかし、そういう人間劇に熱狂する幅広い大衆が出現したという意味において、彼が創造したものは人間を見つめんとする人間そのものであったと言ってよいのではないだろうか。

とにかく、そうした名声をよそに、すでに1611年には多分最後の作品『あらし』を書き上げたであろう彼はロンドンを去って、生まれ故郷ストラットフォードで静かな余生を送っていた。1613年の大火によって、昔彼の本拠であった地球座が焼失してしまったことは彼にとってはきっと大きなショックであったに違いない。

そして1616年。

52才の彼は、その死（4月23日）の約1か月前、3月25日、かねて作らせてあった3枚の遺言書にそれぞれ一つずつの署名を済ませたのであったが、これがまた後の世の果てぬ論争を生むこととなった。

（昭和28年 学芸学部4年制中学校課程音楽教室卒）

平成28年度 高校・特別支援学校総会並びに講演会

部会長 **はやし 林** **ひろ 博** **こ 子**

平成28年度の高校・特別支援学校部会総会は、平成28年8月20日（土）に、ホテルグランドパレス徳島にて、渭水会本部から秋山賢治副会長様をはじめ、毛利久康理事長様、大井美弥子事務局長様、総合科学部から平井松午学部長様のご臨席を賜るとともに、顧問の方々、高校・特別支援学校会員の皆様のご出席のもと盛大に開催しました。

総会では、平成27年度の会務報告・決算報告の後、平成28年度の役員選出、会務計画・予算案についての審議を行いました。会務報告・決算報告・会務計画・予算案については、事務局提案のとおり承認されました。

平成28年度の役員については、現職の校長が副会長に、現職の副校長・教頭が監事に、退職された校長先生方を顧問に就任していただくことで了承されました。また、今回の総会において次期部会長として、徳島視覚・聴覚支援学校の上野清文校長先生を選出し、上野校長先生からご快諾いただきました。その後、出席者全員で写真撮影し、和やかな雰囲気の中で総会を閉じました。

また、本年度は、徳島大学が学部の新設・改組と大きく変革を遂げたこともあり、総合科学部総合理学数学科学科長の片山真一教授をお招きし理工学部応用数理コースについてご説明をいただきました。

さらに、講演会では、元県立高等学校長であり昭和47年3月にご卒業の宇山孝人先生を講師にお招きし、「阿波九城の成立と終焉をめぐって」と題してご講演をいただきました。

阿波九城とは、一宮城（徳島市）、牛岐城（阿南市）、仁宇山城（那賀町）、鞆城（海陽町）、撫養城（鳴門市）、西条城（阿波市）、川島城（吉野川市）、脇城（美馬市）、大西城（三好市）の9つの城のことです。阿波九城は豊臣政権の城郭政策によって成立し、元和の一國一城令を経て、最終的には島原の乱後の老中松平信綱の古城破却指示により終焉を遂げました。その結果、独立性の強かった城番は蜂須賀家中に取り込まれ、家老として領国経営の中核に据えられたことなど、先生がこれまで長年の間、研究をされてきた成果を資料をもとに興味深く伺うことができ有意義な講演会となりました。

その後出席者全員で写真撮影をし、和やかな雰囲気の中で総会・講演会を閉じました。
（昭和55年 教育学部中学校教員養成課程卒）

総会・講演会・懇親会

日 時 平成28年8月20日（土）

場 所 ホテルグランドパレス徳島

講演会講師：宇山 孝人 氏

（昭和47年3月卒元池田高等学校校長）

演題：「阿波九城の成立と終焉をめぐって」

平成28年度役員（敬称略）

顧 問 平尾隆信 出葉秀樹 住友一郎
新開秀樹 富田充宏

（以上総会出席者） 計82名

会 長 林 博子（川島中・高等学校）

副会長 松山隆博 上野清文 竹内圭三
山村 晃 柿 浩一 中内貴文

監 事 山村啓治 森本康司 三木正士
宮崎 衣 名山 優 新居見猛
中村ゆかり 中井邦枝 糸林祐紀
猪子秀太郎 向井和博 小谷慎一
名山泰子

事務局 川島高等学校 ☎0883-25-2824
山村啓治 中村ゆかり 志摩正師
乾 一美 西川和恵 北谷雄一
中野博子 藤本尚幸

次期会長 上野清文
（徳島県立視覚・聴覚支援学校校長）
（昭和59年卒業）



総会の様子



講師：宇山孝人先生

徳島の教育を考える会及び同窓会

まん ぎょく よし ひろ
萬 玉 吉 博

・日 時 平成28年11月27日（日）

・場 所 ホテルクレメント徳島

・研修内容

誰言うことなく同窓会の話が出たのは、50歳を過ぎた頃で、県内を5地域（徳島・南部・鳴板・阿植名・三美）に分けて担当、3年に1回実施で決行することになった。

昭和38年3月卒の同期生は76名で、内55名が県内、18名が県外で教職に就いた。

平成5年にスタートした熟年同窓会は、毎回、会員の半数以上が参加し、現職教員がほとんどの会だけに、同窓会の中身は、県下

の教育実情、現場の問題点、児童生徒指導のあれこれ等、教育論にいとまがなかった。この同窓会を「徳島の教育を考える会に変更する？」等の名案も出るくらいの楽しい会であった。まさに、「喜々快々」である。

第1回から20年経った平成25年4月13日開催の第8回同窓会は、歳も70を過ぎたし、自己の健康管理にウエイトを置こうと、「これが最後の同窓会」と銘打って計画し、生存者69名中40名から参加の返事を貰い歓喜したものである。が、当日早朝5時の地震で、関西圏からの交通遮断という問題が生じて29



名で開催した。最後のはずが、「2年後にしよう」に決定し、更に28年から寄れる者で毎年やろう……に変更し、現在に至っている。

前回は27年11月、今回は28年11月27日にクレメント徳島で24名が参加して実施した。初めて渭水会の助成事業の応援を得て盛会豪華になり、県教委生涯学習課の講師団に登録されている同期の近清君の「楽しい算数」の研修もでき、中身の濃い会であった。更に29年度は、11月26日に実施することが決定している。

チームワークの良さを自負する我が三八会は、学芸学部入学当初から異常集団であったのかも知れない。学生課に注意されながらも学年遠足を計画、実行したり、教員になるならまず県内を知ろう…をスローガンに、当時の渭水会が助成した「徳大研修バス」を使って、轟の滝、鷺敷ライン、大歩危小歩危観光をしたり…いつも44人定員満タンの交

流会をよく実行したものである。あの交流の心が60年後の今なお残っているとすれば、にやりとしたくなるものである。今後の健康管理や交流にもあのチームワークを生かした

いものである。

(28年末現在8名他界、89%生存)

(昭和38年 教育学部4年制小学校課程卒)



徳島市退職校長会講演会

みや きた み え こ
宮 北 美恵子

徳島市退職校長会は、会員の研修と相互の親睦を図り、併せて本市の教育振興に寄与することを目的として活動を続けています。主な活動として、「総会・新入会員歓迎会」「叙勲・大臣表彰(章)等祝賀会並びに講演会」に加え、教育支援部が中心になって、子ども支援活動を行っています。今年も徳島市・名東郡内全小学校4年生以上の子どもたちを対象に希望者を募り、「子ども歩き遍路ツアー」を実施しました。また、「歩く遍路遠足サポート事業」として、学校行事の遠足のお手伝いもしています。

世界に誇る文化遺産である四国八十八ヶ所のお寺を訪ねることで、身近のすばらしい先人の歩みを理解するとともに、それを守り、自らのことばで世界に発信できる子どもの育成に寄与しています。

同時に、子どもたちと「同行二人」、共に歩くことで、子どもたちの体力向上、私たち会員の体力維持の一助になればとも考えております。

さらに、会員の絆を深めるための活動として、「いきいきサロン」を実施し、会員相互の親睦・情報交換にも努めています。

では、今年度開催の「祝賀会・講演会」での「講演」について次のようにご報告いたします。



1. 期 日 平成28年12月11日(日)
2. 会 場 ホテルグランドパレス徳島
3. 演 題 「心と体をいやす笑いの力」
～笑いヨガで超健康になる～
4. 講 師 中瀬 勝則 氏
5. 講演要旨

★笑いには免疫力を高める働きがあるが、人間、年と共にだんだん笑わなくなってきた。それならば、運動として笑いを生活に取り入れよう。笑いは認知症の予防にもつながると考えている。

★「笑いヨガ」は健康運動の一つである。運動として「笑い」を、呼吸法を「ヨガ」から取り入れている。笑いは伝染する。作り笑いでもいい。まず笑おう。幸い、体(脳)は、作り笑いとは本当の笑いを区別できず、どんな笑いでも「笑い」として受け止めてしまう。

簡単に笑って免疫力をアップしよう。笑いは鍛えられ、訓練できるから。

★年をとるとだんだん呼吸が浅くなる。これは認知症の始まりにつながりかねない。

運動するときは、肩幅に足を開き、息を吐きながらハッハッハッと言葉を入れる。

★笑いは一人でもできる。

15秒間声を出すと、1日の運動量が確保できる。

★笑いを習慣にすると、人生は劇的に変わる。

笑う際のポイントは、①手拍子、

②呼吸、③子どもの心、④ナマステ笑いの4点。

1万歩も歩かなくてよい。15分歩いて15秒笑い、健康寿命を延ばそう。笑うことは、免疫力をアップし、超健康に過ごす最高の薬である。

《参加者の感想》

「笑い」は健康に良いと頭ではわかっていたが、なかなか運動になるほどは笑ってなかった。このお話を聞いたからには、笑いを百薬の長と考え、生活の中に意識的に「笑い」を取り入れたい。

(昭和44年 教育学部小学校課程地理学教室卒)



徳島大学書道部・OB会書作展

徳島大学書道部OB会会長 とみ ひさ かず よ
富 久 和 代

徳島大学書道部OB会は、会員相互の研修と親睦を図ることを目的とし、毎年総会・研修会等の活動をしています。

「徳島大学書道部・OB会書作展」もその活動の一つで、平成17年から書道部とOB会の合同で開催しています。それ以前にも、書道部の作品展には賛助という形でOB会員が数点ずつ出品してきましたが、部員の減少で書道部だけの作品展開催が厳しくなったため、OB会としても書道部の支援と会員の作品発表の場として合同で開催することになりました。



「平成28年度徳島大学書道部・OB会書作展」は、平成29年3月17日（金）～19日（日）、徳島大学地域・国際交流プラザギャラリー新蔵を会場として開催しました。

今回の書作展では書道部顧問の東南光徳島大学名誉教授の作品を始め、OB会員27



展示作業の後で

名、学生5名の漢字や仮名、調和体など35名の多彩な作品を展示することができました。また、新年会で参加者が揮毫した色紙も展示しました。

前日には、学生とOB会員が協力して作品の展示作業を行い、また最終日には15名が参加して学生とOB会員の交流会を実施しました。書道部の現状や今後について話し合う中で、日ごろなかなかできない学生とOB会員の交流ができました。

書作展中の来場者は100名弱と少なかったのですが、県内各地また県外から来場したOB会員もいて、書作品の前で、また過去のOB会や書作展のアルバムを囲んで話が弾む場面があらちこちで見られました。

この書作展は小規模ですが、今年も書道部と書道部OB会にとって大変有意義なものとなりました。書道部員の増加と本書作展の発展を願いつつ今後も続けていきたいと思っています。

（昭和42年 教育学部中学校課程国語教室卒）



会場の様子



学生とOBの交流会

教育課題研究会

おく むら よし お
奥 村 兆 男

教育課題研究会は、現代の教育現場の様々な課題を幅広く取り上げ、各種の講演会や研究会に参加し、その内容について感想や意見を出し合い、教師力の向上を目指す研究グループです。

今回は、平成29年6月22日（木）に行われた「学力向上」に関する講演会をテーマに話し合いました。



講師の酒井勇介氏

当日の講師は、家庭教育プロデューサーの酒井勇介氏で、演題は「学力向上のヒント」とありましたが、学力向上にとどまらず、現在の日本の教育の課題について、様々な角度からお話をいただきました。

講演内容の骨子は、次のとおりです。

- （1）子どもたちのSOSに気づく方法
- （2）「勉強なさい・しよう!」は必要か？
- （3）成績が上がらない子どもの特徴？
- （4）家庭環境を見直す
- （5）どこで？何を？いつ？
- （6）新学習指導要領で求められる能力とは？（アクティブ・ラーニング）
- （7）遊び感覚！家庭学習メニュー
- （8）良い事・悪い事を理解させる教育
- （9）子どもたちの価値ある将来を願って！（大切な時間の話と学力データ）

その中で特に心に残ったお話として、「家

庭での時間割」の紹介がありました。学校だけでなく、家庭でも時間割（具体的な一日のスケジュール）を決め努力の積み重ねをすることが、学習習慣の定着と深く関係しているというものでした。子どもにとっては、「勉強なさい。勉強した？」と押し付けると、精神的なストレスになると考えがちですが、親子で勉強をするルールを決め、怒らずに挨拶をする感覚で「勉強なさい。勉強した？」と言い続けることが大切であるということでした。そして、「5分だけ、10分だけやってみよう」と具体的に指示を出し、勉強を続けることが一番大事で、そのことが習慣になると説明していました。また、成績が上がらない子どもの特徴として、「①学習時の姿勢が悪い。②時間を守らない。③どこでもゲームや携帯電話を触る。」の三点を挙げ、これらは社会人になっても評価される項目になると指

摘していました。

酒井勇介氏が述べる「学習習慣の定着や学習意欲の向上」には、その土台となる生活習慣の見直しが重要となってきます。「朝ご飯はきちんと食べているか。何時に寝て起きているか。何時間ゲームやテレビを見ているか。保護者が管理し、子どもも守っているか。この部分が全ての土台となる。」と熱く語られました。

講演会後の情報交換では、会員から、次のような意見が出されました。

・酒井先生の実践に基づいた説明は大変説得力があり、わかりやすかった。今回の講演は家庭教育についてが大部分であったが、学力向上を目指していく上で今回の講演は、自分たちの教育の方向性の整

理につながるといった。

- ・「時間の貯金をする」という考え方がとても参考になった。毎日「忙しい」と言い訳にしていたが、時間は見つけていくものだと改めて思った。
- ・「子どもは突然『賢い子』や『悪い子』にならない」との話が印象に残った。日頃から子どもの態度を十分見ていなかったことに気づかされ、反省した。学力だけではなく、道徳心や「良い事・悪い事を理解させる教育」の判断力も同じくらい大事だという話が参考になった。
- ・新しい時代に必要となる資質・能力の育成で、「生きて働く知識・技能の習得」、「未知の状況に対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」、「学びを人生や社会に生

かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養」とは、それぞれをバラバラに切り離して取り組むことではないと改めて思った。

教育課題研究会では、今後も、しっかりと会員の資質向上を図っていきたいと思います。

(昭和63年 教育学部養護学校教員養成課程卒)



講演会場の様子

平成29年度 高校・特別支援学校総会並びに講演会

部会長 う え の きよ ふみ
上 野 清 文

平成29年度の高校・特別支援学校部会総会は、平成29年8月5日(土)に、ホテルグランドパレス徳島にて、渭水会本部から秋山賢治副会長様をはじめ、毛利久康理事長様、総合科学部から栗栖聡学部長様のご臨席を賜るとともに、顧問の方々、高校・特別支援学校会員の皆様のご出席のもと盛大に開催をしました。

総会では、平成28年度の会務報告・決算報告の後、平成29年度の役員選出、会務計画・予算案についての審議を行いました。会務報告・決算報告・会務計画・予算案については、事務局提案のとおり承認されました。

平成29年度の役員については、現職の校長が副会長に、現職の副校長・教頭が監事に、退職された校長先生方を顧問に就任していただくことで承されました。また、今回の総会において次期部会長として、徳島県立池田高等学校の竹内圭三校長先生を選出し、ご快諾いただきました。

また、総会終了後には、徳島大学大学院社会産業理工学研究部社会総合科学部域人間



講師：上岡義典先生

科学系心理学分野教授上岡義典先生を講師にお招きし、「発達障害の理解と良好なつきあい方」を演題に、ご講演をいただきました。

講演では、幼児から成人までの幅広い年代の発達障がい児者の特性や困難さ等を踏まえた適切な支援や関わり方等について、具体的な事例や資料等に基づいて、わかりやすく説明がありました。

はじめに、発達障がいの定義や法令(「改正発達障害者支援法」)等の基本的な内容について、次に、代表的な3つの発達障がい、「自閉症スペクトラム障害(ASD)」、「注意欠如／多動性障害(ADHD)」、「学習障害(LD)」の各特性(例えば、自閉症スペクトラム障害では、社会性の障害、コミュニケーションの障害、想像力(イマジネーション)の障害)や他の問題(感覚面や運動面)等について理解を図ったあと、適切な対応や関わりのポイントについて説明がありました。

適切な対応では、心理学的アセスメント、多動・不注意・衝動性のコントロール、ルールの獲得、適切な薬物療法等が有効であること。

適切な関わり方では、視覚の活用、予定やスケジュールを示す、穏やか且つ簡単な表現ではなしかける等が大切であることの説明がありました。

また、講演の中で行った「ADHD児の注意欠如」や「LD児の苦手な読み」の疑似体験では、対象児の学習に対する困難さや自尊心の低下を招く要因等を体感することもできました。

最後に、発達障がいの大学生や成人に対して、周りにいる私たちができること(具体的な支援方法を検討することや丁寧に聞くこと等)についてご示唆をいただき、参加者からも数多くの質問が出る等、有意義な講演会となりました。

その後出席者全員で写真撮影をし、和やかな雰囲気の中で総会・講演会を閉じました。

(昭和59年 教育学部養護学校教員養成課程卒)

総会・講演会・懇親会

日 時 平成29年 8 月 5 日 (土)

場 所 ホテル グランドパレス徳島

講演会 講師：徳島大学大学院

社会産業理工学研究部 社会総合科学部 域人間科学系心理学分野教授 上岡 義典 氏

演題：「発達障害の理解と良好なつきあい方」

平成29年度役員(敬称略)

会 長 上野清文

(徳島視覚・徳島聴覚支援学校校長)

次期会長 竹内圭三

(徳島県立池田高校校長：昭和57年卒業)



総会の様子

総科ニュース

※この総科ニュースについての詳細は、徳島大学総合科学部総務係にお尋ねください。

徳島大学総合科学部総務係 TEL: 088-656-7103 FAX: 088-656-7298

E-mail: sksoumk@tokushima-u.ac.jp

【総合科学部の1年】

平成28年(2016)9月～29年(2017)8月

※平成28年8月29日(月)～9月1日(木)

インターユニ・フィールドワークの実施

総合科学部が参加する地域系大学・学部等連携協議会との共催の下に、北海道教育大学函館校が受け入れ大学になってインターユニ・フィールドワーク・プログラム2016 in HAKODATEが開催されました。総合科学部からは平井学部長、豊田哲也教授と学生7名が参加しました。

※平成28年9月29日(木)・30日(金)

国立大学法人17大学人文系学部長会議への参加

山形大学人文学部主催により、第16回国立大学法人17大学人文系学部長会議がホテルメトロポリタン山形で開催され、大学改革にともなう学部・大学院の改組の現状と今後の課題等について意見交換されました。

※平成28年10月13日(木) 優秀学生(3年次学生)表彰式

学部3年次の優秀学生13名を表彰いたしました。

※平成28年10月20日(木) 徳島大学びざん会の開催

徳島大学びざん会(同窓会連合会)がザ・グランドパレスで開催されました。

※平成28年11月17日(木)

学部長と学部学生との懇談会を開催

学生17名、教職員12名が参加し、学生委員長の司会により、事前アンケートで寄せられた質問・意見を中心に、学生からの質疑に答える形で行われました。

※平成29年2月7日(火) 康楽賞贈与式の举行

徳島大学の優秀な専任教員および学生を対象とした公益財団法人康楽会による康楽賞の贈呈式が、大塚講堂(蔵本キャンパス)で举行されました。総合科学部の受賞者は次の方々です。

〔教員の部〕 上野 加代子 教授「児童虐待問題の社会構築主義分析ならびに人の国際移動の研究」

〔学生の部 学術研究関係〕 大学院総合科学教育部 博士前期課程2年次 高岡美沙希
総合科学部 4年次 大塚あやね、岩本侑姫、宮本理沙

〔学生の部 奨学生関係〕 大学院総合科学教育部 博士前期課程2年次 井上翔太
総合科学部 4年次 武田渚、谷間直人、永井航太

※平成29年2月18日(土)

徳島大学総合科学部パネルディスカッションの開催

徳島県日中友好協会(会長 葭森健介 総合科学部教授)との共催によるパネルディスカッション「転換期の世界情勢を探る ― 日・米・中の関係はどうなるのか? ―」が、総合科学部けやきホールで開催され、当学部の 葭森健介 教授の司会のもと饗場 和彦 教授、水島 多喜男 教授もパネラーとして参加しました。

※平成29年2月22日(水)

教育部長と大学院学生との懇談会を開催

修了予定者4名、教職員10名が参加し、大学院教務・入試委員長の司会により、大学院生活、履修、修士論文、大学の設備などについての懇談が行われました。

※平成29年2月23日(木) 学長と学生との懇談会を開催

総合科学部からは学生3名(総合科学教育部1名、総合科学部2名)が出席しました。

※平成29年3月13日(月) ラトビア大学人文社会科学部(ラトビア共和国)と学術協定を締結

佐久間副学部長と田久保総合科学部国際交流委員会委員長がラトビア共和国・ラトビア大学を訪問し、ラトビア大学人文社会科学部と部局間交流協定を締結し、調印式が執り行われました。

※平成29年3月23日(木) 平成28年度卒業式・修了式ならびに優秀学生表彰式の举行

アスティとくしまで午前10時より举行されました。午後には総合科学部において優秀学生表彰および大学院学位授与式が行われ、14時30分よりパークウェストンホテルで謝恩会が開催されました。学部卒業生は249名、大学院修了者は博士前期課程の地域科学専攻29名、臨床心理学専攻12名、博士後期課程地域科学専攻が1名。優秀学生表彰者の4年生は次の通りです。

〔人間文化学科〕 池田瑞姫、武田 渚、二宮苑花、

小林里穂、青木美月

〔社会創生学科〕 永井航太、谷 和音、木具穂美、

大塚あやね、酒井昭宏

〔総合理数学科〕 片桐麻衣、谷口智紀、安部志歩

※平成29年3月23日(木) 渭水会会長賞の授与

卒業式当日、12時40分より総合科学部第2会議室で、渭水会の石井 博会長より、第3回渭水会会長賞として表彰状と賞金を受賞者に渡されました。詳細は渭水会報記事をご覧ください(→P20参照)。

＊平成29年3月27日(月)

永年勤続退職者表彰式・祝賀会の挙行

＊平成29年4月1日(土)

大学院社会産業理工学研究部の発足

教員組織について、大学院総合科学研究部に代わり、大学院社会産業理工学研究部が設置されました。大学院社会産業理工学研究部は、人文社会科学、生物資源産業学、理工学といった文理を超えた諸科学を基盤とし、学際的・総合的な教育研究活動を通じて、21世紀の社会や産業、技術の持続可能な発展に寄与することを目的としています。また、大学院社会産業理工学研究部は、社会総合科学域、生物資源産業科学域、理工学域の3学域で構成され、社会総合科学域に所属する教員は主として総合科学部および大学院総合科学教育部において教育研究活動に携わっています。社会総合科学域は、国際教養系、人間科学系、公共政策系、地域情報系という4つの系(大講座)からなり、それぞれ国際教養コース、心身健康コース、公共政策コース、地域創生コースの教育を担うとともに、グローバル化、健康社会づくり、行財政改革、地域活性化などの課題解決に取り組んでいます。

＊平成29年4月3日(月) 平成29年度辞令交付式の挙行

午前9時30分より、徳島大学本部で野地澄晴学長より辞令交付が行われました。

＊平成29年4月6日(木) 平成29年度入学式の挙行

午前10時より、アスティとくしまで平成29年度徳島大学入学式が挙行されました。同日午後には総合科学部で大学院オリエンテーションも行われました。入学者数は、総合科学部281名、大学院総合科学教育部博士前期課程33名、博士後期課程4名。

＊平成29年5月27日(土) 渭水会総会の開催

当日14時より総合科学部第1会議室で開催され、平成29年度の事業計画が承認されました。

＊平成29年6月22日(木)

平成29年度総合科学優秀賞受賞者表彰式の挙行

優れた研究成果を発表した総合科学部教員に対して贈られる総合科学優秀賞に小田切康彦准教授が選出され、表彰式が行われました。研究テーマは、「地域創生・総合科学に関する研究」です。

＊平成29年7月30日(日)

総合科学部振興会総会ならびに保護者懇談会の開催

在学生の保護者会である総合科学部振興会の評議員会・総会ならびに保護者懇談会(午後)が開催されました。参加者(延べ数)は延べ119名(実数60名)。

＊平成29年8月8日(火) オープンキャンパスの開催

総合科学部(社会総合科学科)のオープンキャンパスが開催されました。参加者数(延べ数)は、高校生798名、保護者272名。

【人事異動】

＊学部長の紹介

総合科学部学部長に栗栖 聡 教授が選出されました。任期は平成29年4月1日～31年3月31日までの2年間。

＊評議員の紹介

総合科学部評議員に桑原 恵 教授が選出されました。任期は平成29年4月1日～30年3月31日までの1年間。

＊副学部長の紹介

総合科学部の副学部長(教育・社会連携担当)に平木美鶴 教授、副学部長(研究・大学院担当)に高橋 晋一 教授、副学部長(グローバル化担当)に佐久間 亮 教授が選出されました。任期は平成29年4月1日～31年3月31日までの2年間。

＊コース長の紹介

総合科学部社会総合科学科の国際教養コース長に井戸慶治 教授、心身健康コース長に佐藤 充宏 教授、公共政策コース長に水島 多喜男 教授、地域創生コース長に豊田 哲也 教授が選出されました。任期は平成29年4月1日～31年3月31日までの2年間。

＊教職員の異動

平成29年3月31日付で、次の教職員が退職されました。

行實 鉄平 准教授(スポーツ経営学)

王 冷然 准教授(民法学)

平成29年4月1日付で、次の教員が教授に昇任されました。

スティーヴンズ、メリディス・アン 准教授(英語教育学)

荒武 達朗 准教授(アジア社会論)

村上 敬一 准教授(日本語学)

佐藤 裕 准教授(認知心理学)

衣川 仁 准教授(日本古代・中世史)

中村 豊 准教授(考古学)

平成29年4月1日付で、次の事務職員が着任されました。

山川 敦子 氏(学務係主任)

松尾 真哉 氏(総務係事務員)

椎野 真 氏(総務係事務員)

熱田 真紀 氏(学務係事務補佐員)

＊新任教員の着任

平成29年4月1日付で、次の教員が総合科学部に新たに着任されました。

柴田 堯史 講師(憲法学)

徳大ニュース

徳島大学に関するニュースをお届けします。詳細は徳大広報並びに本学ホームページを御覧ください。

また、会員の皆様の御意見や御要望をお寄せください。

徳島大学総務部総務課 TEL: 088-656-9979 FAX: 088-656-7012

E-mail: dosokikink@tokushima-u.ac.jp URL: <http://www.tokushima-u.ac.jp>

1 徳島大学はクラウドファンディングに挑戦

徳島大学は、研究者の研究費獲得手段の一つとして、クラウドファンディングに挑戦しています。

クラウドファンディングは、インターネット等を利用して、研究費を必要としている研究テーマを社会にわかりやすく説明し、広く社会から研究資金を募ることを目的としています。

平成28年11月1日には、世界の人々に役立つ研究や事業などを支援するための仕組みとして、一般社団法人大学支援機構の運営による「Otsucle (おつくる) <https://otsucle.jp/>」というサイトでプロジェクトの資金募集を開始しています。

2 仁生イノベーショングラントの創設

元徳島大学薬学部教授であった 故 藤多哲朗 元京都大学教授の寄附金により、平成28年度、学生が創出した新規アイデアの実現化、社会への還元を目的とした助成金「仁生 (じんせい) イノベーショングラント」が創設されました。

第1回の助成は、学生グループ12件の応募のうち「ボードゲームによる「おへんろ」の世界発信プロジェクト」はじめ6課題が採択され、平成28年6月6日に交付式、平成29年3月22日に成果報告会を開催しました。

当助成金は平成29年度も実施しています。

3 「平成29年度インターンシップフェア」を開催

平成29年5月11日、文部科学省の「平成27年度 地(知)の拠点大学による地域創生推進事業 (COC+)」に採択された「とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム」の一環として、平成29年度実践力養成型インターンシップの実施にむけた「インターンシップフェア」を開催しました。

フェアには、学部1～4年生及び大学院生の約150名が参加し、どの学生も積極的に取り組んでいました。

今後は、今回のフェアを通じてエントリーした学生と企業との面談によるマッチング及び事前研修を経て、それぞれのインターンシップがスタートします。

4 日本学士院第66回公開講演会を開催

平成29年5月20日、徳島大学長井記念ホールに於いて日本学士院第66回公開講演会を開催しました。

日本学士院会員の本庶佑先生から「免疫力でがんを治す」、同会員の野中郁次郎先生から「知識創造によるソーシャル・イノベーションの実践」についてご講演いただき、県内外から参加した約250人の参加者は、熱心に耳を傾けました。

徳島大学基金へのご協力をお願い

「徳島大学基金」は、皆さまから事業区分ごとにご支援いただいた寄附金を基金として積み立て、徳島大学の教育研究等の発展のために使用させていただくものです。

平成28年にリニューアルし、webサイトからクレジットカードやコンビニを利用したお申し込みも可能となりました。また、古本の買取額を募金していただく取組も行っています。

詳しくは徳島大学基金ホームページ (<http://www.tokushima-u.ac.jp/contribution/>) をご覧ください。

●教育・研究・社会貢献事業基金

プロジェクト事業や全学的な教育・研究、管理運営、環境整備などへのご支援

●国際交流・グローバル化事業基金

留学、教員の海外派遣など、国際交流事業へのご支援

●修学支援事業基金

授業料等の免除など、学生の修学へのご支援

●学部等支援基金

各学部、先端酵素学研究所の教育・研究や管理運営、環境整備へのご支援

●古本募金 <https://www.furuhon-bokin.jp/tokushima-u/>

不要になった本、CD、DVDを寄贈いただき、買取金額を基金に充てます

ご協力をお願いします

●基金に関するお問合せ

徳島大学基金事務局
(担当: 総務部総務課)

TEL. 088-656-9981

●申込手続き、税制上の優遇

措置に関するお問合せ
徳島大学財務部資産管理課
TEL. 088-656-7037

●助成事業の申し込みについて

助成事業の要項に該当する事業をご計画の会員がおられましたら、お申し込みください。P45の申請書をコピーしてお使いください。事務局にご連絡いただければ、様式（Word形式）をお送りします。お問い合わせ・お申し込みについては事務局までお願いいたします。

●異動届のお願い

会員相互の親睦等同窓会活動に、また、会報のお届けにと名簿は、渭水会にとって、重要な財産のひとつです。名簿の整備には、鋭意努力しておりますが会員の皆様方のご協力が不可欠です。

現在、転居等により会報をお届けできていない会員も多数おられます。お手数ですが異動等ございましたらその都度事務局までお知らせいただければ幸いです。

会員数も膨大になり同姓同名の会員もおられます。誤記を避けるためにも、卒業（修了）年、課程（学科）、専攻（コース）、旧姓を記載いただき、できるだけ文書・ファックス・メールにてお知らせくださいますようお願いいたします。

●終身会員の募集についてのお願い

渭水会では、昭和54年入学生より終身会費制になりましたが、まだご存じない方がおられます。同窓会の折に渭水会の組織・事業等をお話いただき終身会員になってくださるようお勧めいただければ幸いです。終身会員には会報が郵送されます。

終身会費納付額

卒業（修了）年	納付額
昭和21年以前	4,500円
22～27	7,500円
28～33	10,500円
34～39	13,500円
40～45	16,500円
46～51	19,500円
52～57	22,500円

郵便振替口座番号 01610-1-21392
加入者名 徳島大学渭水会

なお、会報がお手元に届いている方は、すでに終身会員ですが、ご自分が終身会員かどうか分からない方は、事務局までお問い合わせください。

渭水会事務局

事務局は総合科学部1号館北棟1階入り口すぐ（部屋番号1N01）です。

業務時間および連絡方法は、以下の通りです。

時間／水曜日 13：30～17：00

（祝祭日および大学の休業日は除く）

TEL 088-656-7293（月～金 10：00～17：00）

FAX 088-657-7467

E-mail info@isuikai.jp

URL <http://www.isuikai.jp>

編・集・後・記

●森の静寂、緑が薫ってきそうな峯幸子さんの『彼方へ』——会報の表紙を飾る芸術作品を楽しみにされている方も多いと思います。今頃、この桂は紅葉に輝き、甘い香りに包まれているでしょうか。

昨年度に続き、第9回とくしま芸術文化賞に渭水会からお二人が受賞されました。徳島の芸術・文化を、徳島大学の卒業生が名実ともに牽引しているのだと、誇らしさでいっぱいです。（ね）

●本号の「総科のおたから（P17）」に記されているように、樗並木の樗の寄附者名が不詳となっています。この様に

立派になった樗の寄附者が分からないのは残念です。40年ほど前のこととなりますが、会員の皆様の中でご存知の方がいらっしゃいましたら、渭水会事務局までお知らせください。（J）

●キャンパス内の大きな木々をみるたびに、歴史を感じます。それと同じだけ続いている渭水会の歴史の中に、自分がいることを嬉しく思います。この気持ちを会報をとおして皆さんと共有できれば、と願う日々です。（U3）





ユーカリの花 (総合科学部キャンパスにて)